

255.1
144.1



* 0042379000 *

0042379-000

255.1-144.1

日本教育家文庫

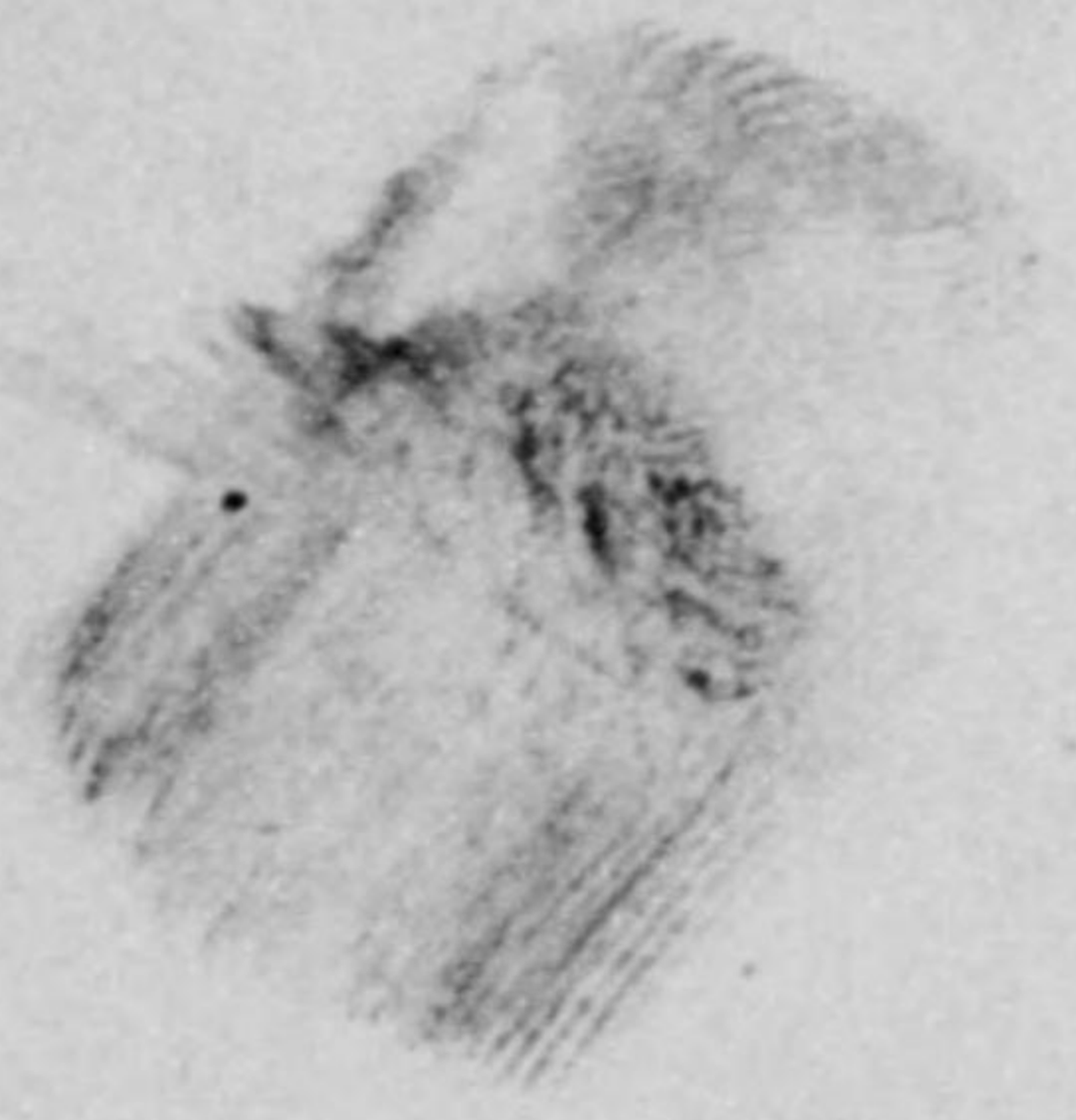
啓文社

第4卷

昭13

AHC

437





日本大學講師 高須芳次郎著

〔日本教育家文庫〕

藤田東湖

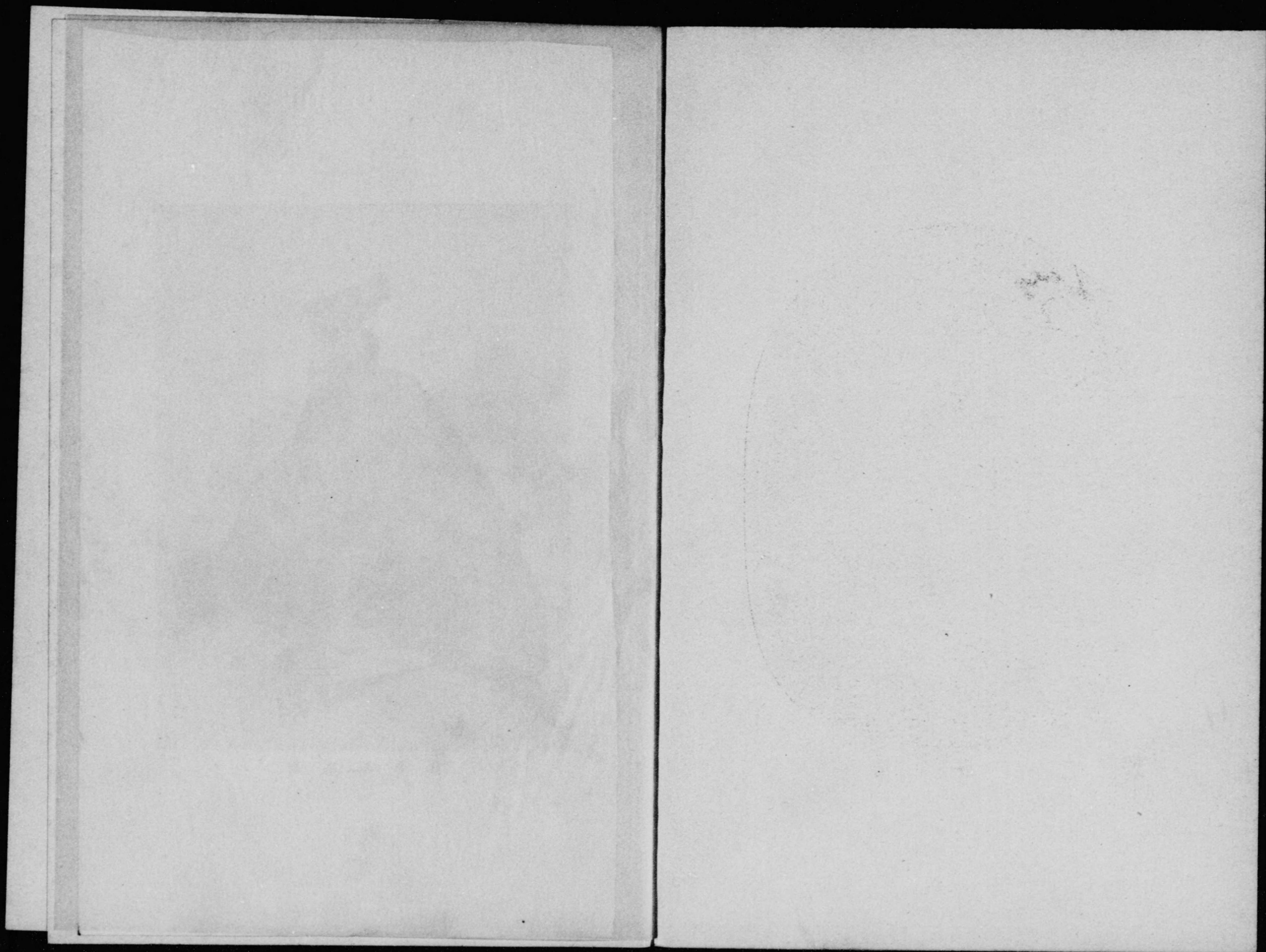
藤田幽谷
會澤正志齋

東京 啓文社 版



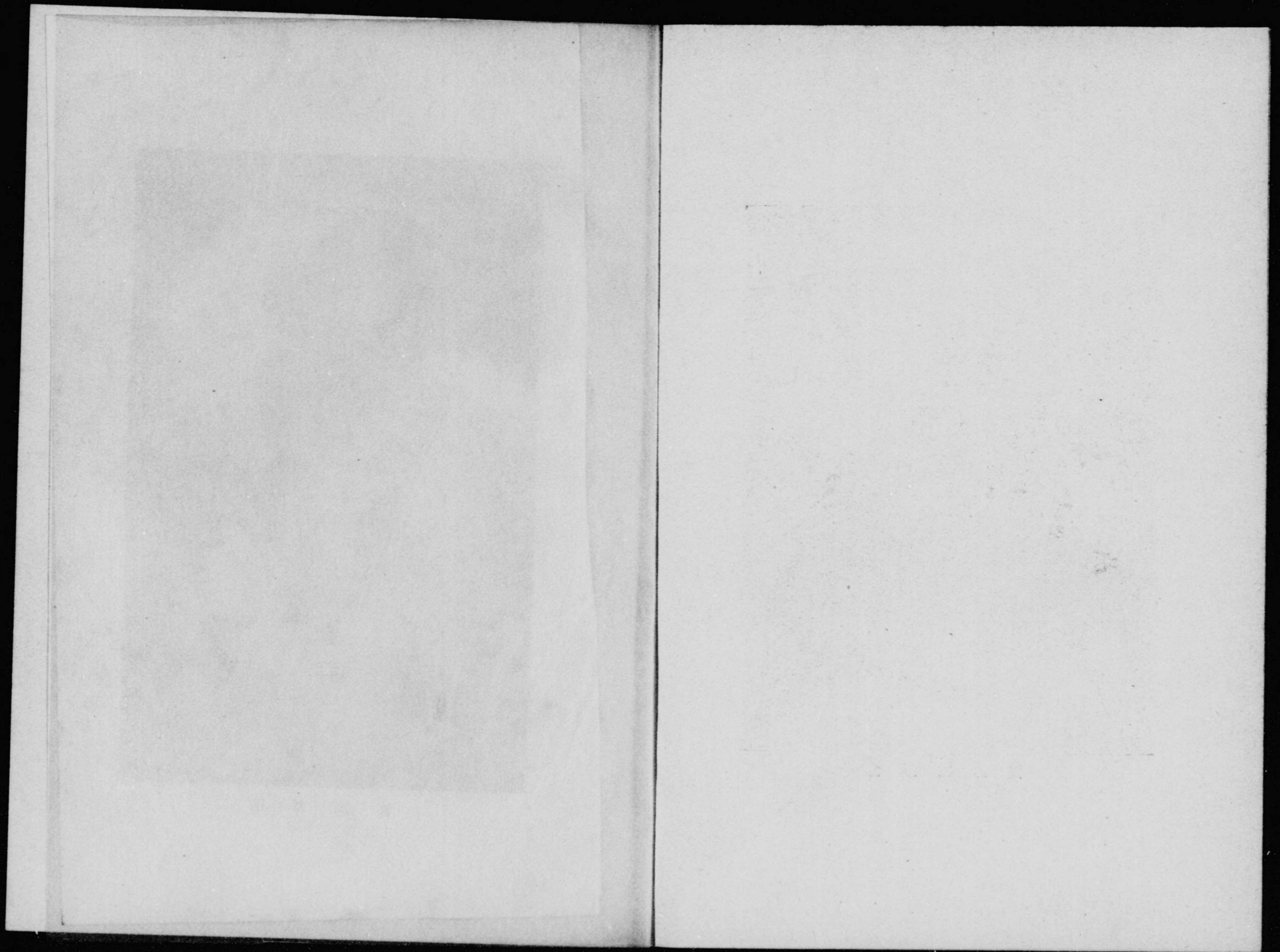


藤田 幽谷





會 澤 正 志 齋





藤田東湖

255.4
1441

序

現代人が水戸學に注意し出したのは、極最近のことである。本來、國學に先立つて生れ、近世的新史學の確立に、政教革新の原理創造に最善を盡し、三百年間命脈を維持して、皇政復古・明治維新に最も大きな貢獻をしたのであるから、今頃は、研究文獻が相當多く出てをらねばならぬ筈だ。

ところが、依然として、之を學的に研究したものが眞に少いのは、學問上から、何より遺憾である。私はそのために、健康を犠牲にするほどの努力のもとに『水戸學派の尊皇及び經綸』（雄山閣出版）を丸四年かゝつて書き、最近、之を雄山閣から出した。それは菊版八百ペエジにちかい本である。

水戸學の全貌は、未熟ながら、以上によつて、その一斑をつくし得た積りである。茲には水戸政教學の中心人物、幽谷・正志齋・東湖らの三大家を撰んで、簡明を旨とした評傳を書

き、その人物と思想とのアウトラインを紹介した。且つ教育方面の交渉については、特に注意した筈である。

之によつて、在來、一般的に知られてをらなかつた幽谷・正志齋の卓越さを知られるであらう事が何より喜ばしい。且つこの機會に水戸政教學が教學その他に向つて、いかに創造的な働きを爲したか、又皇道を基本として國民道德の建設に、内政外交の刷新に、經濟的・社會的方面の新施設に、時勢に適應しつゝ、いかに能くつとめたかといふことの概要を知つて戴くことが出来るならば本懐の至りである。

昭和十一年十二月

高須芳次郎謹識

幽谷 正志齋 東湖

目次

總説……………一

藤田 幽谷

第一章 藤田幽谷の生涯(上)……………三

第二章 藤田幽谷の生涯(下)……………三〇

第三章 幽谷の日本國體論……………五

第四章 幽谷の王道政治説……………六

第五章 幽谷の教育説と倫理道德説……………七

會澤 正志齋

第一章 會澤正志の前半生……………九

第二章 會澤正志の後半生……………九

第三章 正志の日本國體論……………一〇六

第四章 正志の政教一新説……………一三二

第五章 正志の宗教觀と儒學觀……………一三六

藤田 東湖

第一章 藤田東湖の歩いた道(上)……………一五三

第二章 藤田東湖の歩いた道(下)……………一七一

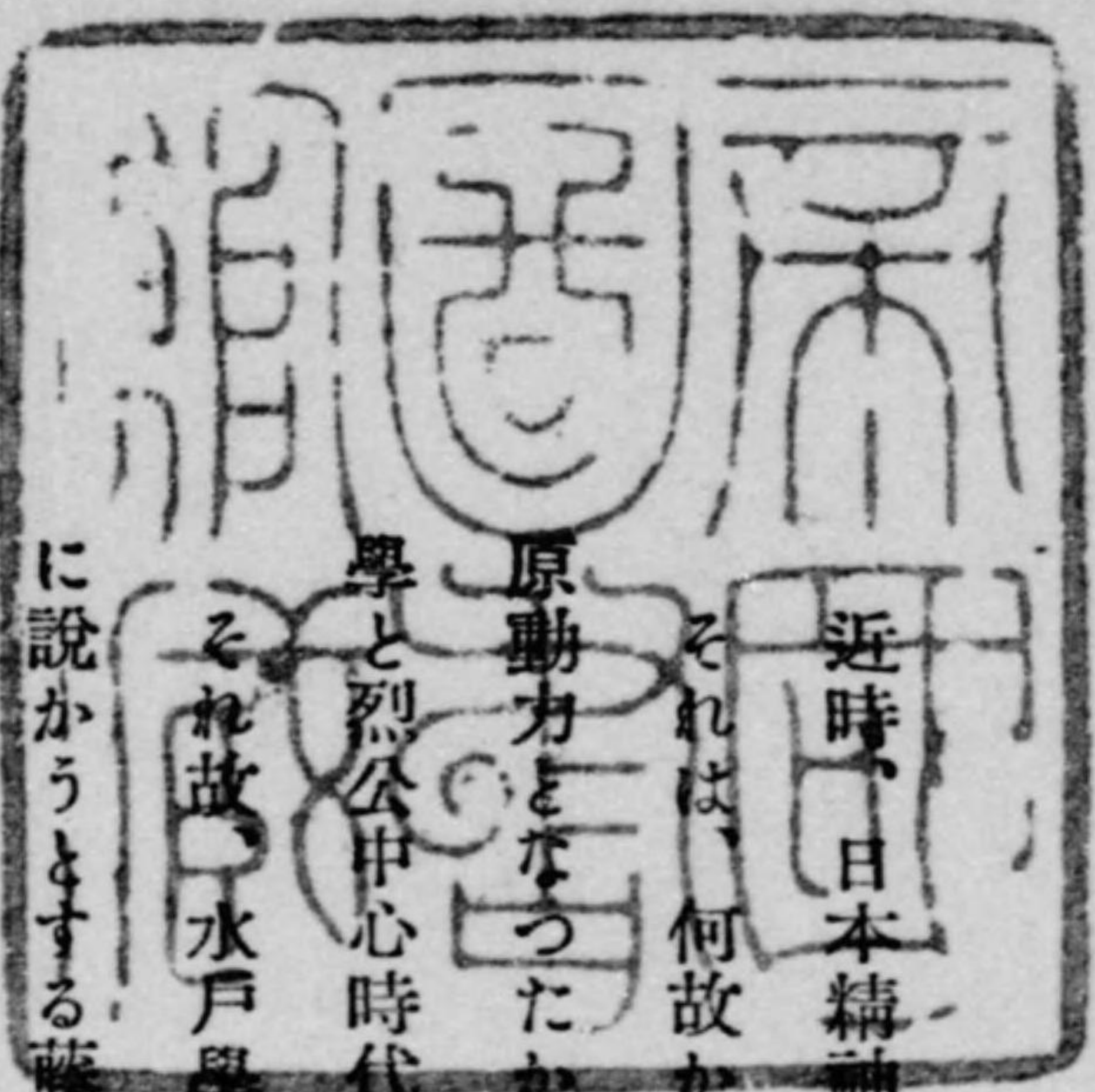
第三章 東湖の國民道德論……………一八八

第四章 東湖の正氣説……………二〇七

第五章 東湖の政經革新説……………二二八

總 說

幕末非常時の日本



近時、日本精神の勃興に伴うて、水戸學に注目するものが急に増加した。それは、何故か。蓋し水戸學は、國學と相列んで、皇政復古、明治維新を實現した大きい原動力となつたからである。在來、水戸學といへば、義公中心時代に略ぼ完成された水戸史學と烈公中心時代に大成した水戸政教學とを混同して了つてゐるものが多い。それ故、水戸學の概念を明確に擱むことが出来ないといふやうな有様に陥つたが、今、茲に説かうとする藤田幽谷(二四三四—二四八六)・會澤正志齋(二四四二—二五二三)・藤田東湖(二四六六—二五一五)らは、いづれも、水戸政教學を大成する上に最も力があつた中心人物であることを先づ茲に確言する。

蓋し水戸政教學は、突如として生れ出たものではない。その淵源・由來は、『大日本史』を中樞とした水戸史學にある。が、内容の上では、時代の相違にもとづいて、おのづから趣を異にした。即ち水戸史學は、『大日本史』をとほして、皇道精神を鼓吹したが、水戸政教學は、『弘道館記』をとほして、主に政治及び教育の革新につとめ、國民道德の建設に向つて、力を注いだ。のみならず、左様した革新・建設の實現へ邁進したのである。

従つて、水戸史學が専ら學的範圍を出なかつたのに對して、水戸政教學は、理論の創造や組織を爲すほかに、實踐的方面にも想ひを致した。そこに、一つの大きい差異がある。

蓋し左様した理由の主なるものについて考へると、水戸政教學の漸進時代に當り、西力東漸の勢が著しく加はつて、日本もその重壓下に置かれようとする非常時に直面しはじめたによると思ふ。日本は、徳川幕府の執政以來、久しく内外無事で、太平を樂しむ日が長く續いた。が、時代は動いてやまない。歐米諸國が領土的野心を東方に逞しうしようとする風潮を強めたにつれて、日本も亦歐米列強の視ふところとならざるを得なかつた。

それは、當時東方諸國のいづれもが避け難い必然の趨勢だつた。ひとり、日本のみがその例外であるべきわけがない。當時、歐米列強は、その物質文明や科學の進歩を強力な道具として、次第に日本に重壓を加へ來つたのである。かうした時代の急潮に先づ注意しはじめたのは、無論、少數の識者に留まり、大衆は、まだ之に氣付かなかつた。

寛政から文化文政にかけての情勢は、表面いかにも太平にちがひなかつた。けれども實は以上のやうな暗潮がひしひしと迫つてゐたのである。加ふるに、幕府を始め諸侯は、武力中心時代から經濟中心時代に移るにつれて、その形式化、固定化と共に次第に經濟的行詰りを生じ、社會問題發生の誘因を胎生してゐた。それらの形勢を見ると、必然、内外多難を意識しなければならぬ。けれども大衆は、概ね目ざめようとしなない。

水戸政教學の興起

この際、内外多難の症狀を自覺したのは、少數の識者に留まつてゐた。その一人が、水戸

の藤田幽谷である。既に幽谷の師、立原翠軒(二四〇四—二四八三)の時に、ロシア南下の勢ひを深憂して、北門經營に着眼した位であつたから、日本は、いつ迄も、平和な夢を貪つてゐることを許されなかつた。

従つて、水戸學派の人々は、在來の史學講究のみに安んじてゐることが出来ないで、次第に眼を内外の情勢に注ぎ、ひとり、一藩の事のみならず、全日本のためにも、深く考ふところがあつた。即ち左様した立場から、皇道を基本として、政治に、經濟に、外交に、教育に、宗教に、一革新を加へようと思考するに至つたのである。

そこから、水戸政教學の芽を生じ、葉を生じ、枝を生じ、幹を生じたのである。即ち非常時の形勢進行に對應して、國民一般を指導すべきイデオロギイを提示せんといふのが水戸政教學の使命だつた。

その先驅者として、勇敢に邁進しようとしたのが、藤田幽谷である。彼れは、時代の豫見者であり、思想上の覺醒者であつた。その基本的教養は、漢學を主とし、國學を従としたが

よく之を活かして、彼れ独自の精神を作りあげ、政治の革新にも、教育の刷新にも在來、概ね觸れることがなかつた新見を述べたのである。

左様した彼れの新見を一貫してゐるのは、明確な皇道精神である。彼れは、早くから日本國體の上に目ざめ、その尊嚴な所以を高調した。左様したところから、彼れの『正名論』『建言論』などが出で來つた。即ち彼れは、大義名分の意味を嚴肅な態度と明快な文章とを以て説き、日本國體の擁護を以て第一義的とした。

かうした建て前から、進んで、日本國民の守るべき新道德の内容に言及し、更に經濟難に喘ぐ士民救濟策にも適切な意見を吐露した。この意味で、水戸政教學の土臺は、略ぼ半ば以上、幽谷の手によつて築かれたといつてよい。

その後を受けて、水戸政教學を大成したのは、水戸烈公(二四六〇—二五二〇)の輔翼となつた會澤正志齋(伯民)及び藤田東湖の二家である。正志は、幽谷門下の第一人者で東湖は、幽谷の子であつたから、この二人は幽谷の學統を繼承して、これを祖述すると共に、その組織

化、體系化につとめた。その結晶として現はれたのが『弘道館記』や、『館記述義』『新論』などである。

水戸政教學の内容

如上のうち、『弘道館記』は、水戸政教學の原理を要領よく述べた經典で、その意味を註解、敷衍したのが『館記述義』（東湖）であり、以上の原理に略ぼ即して、之が時勢上の對策を適切に論述したのが『新論』（正志）である。

云ふ迄もなく、『弘道館記』は、水戸の藩校、弘道館の精神を明かにするために書かれたのである。それは、烈公（徳川齊昭）の命を受けて、東湖が空前の大文章を書く意氣込のもとに起草したもので、嚴にいふと、烈公・東湖の合作だった。即ち内容上、烈公の考へが大分加はつてをり、之を完成するについては、烈公が最後の決定を爲した。

惟ふに、當時の藩校なるものは、概ね保守的に固定して、儒學・漢學などを専ら教へたに

すぎない。そこに、日本的な特色ともいふべきものが殆どなかつた。従つて、西力東漸といふやうなこともなくて、世が太平であつた場合でさへも、時代の進運から、取り残されるべき運命を荷つた存在だった。

それ故、西力東漸の急潮が動き出した以上、當然、在來の保守的内容を一掃して、時勢に適切な内容・精神を具備しなければならぬ。殊に烈公が水戸藩政を支配した時代は、外交國難・政治國難・經濟國難などが一時に蝟集した際で、藩校の教育の上にも、一大刷新を加へねばならない急務に直面したのである。

いかにして外交國難を排すべきか、いかにして政治國難・經濟國難を乗り切り、踏み越えるべきか。烈公・正志・東湖らは、國民思想の統一を以て、國難排除の第一線としたのである。

國民思想の統一

これは、在來の儒教だけでは、到底、物足りない。それは、消極的な力しかない。左様だ

とすると、當然、皇道を以て、一切を統制しなければならぬ。即ち日本國體の尊嚴を明かにし、國體擁護の紐帶たる大義名分の意味を高揚しなければならぬといふのが烈公・東湖・正志らの意見で、この皇道のもとに、國民道德の要素を説き、非常時に善處すべく、舉國一致の必務に言及すべき要を痛感したのである。

従つて、『弘道館記』の内容は、在來、他の藩校において、想ひ及ばぬ大所・高所に觸れ、民族的特長・傳統的美點を明確に高調した。今、茲にこの全文を引用する。

弘道館記

弘道とは何ぞ。人能く道を弘むる也。道とは何ぞ、天地の大經にして、生民の須臾も離るべからざるもの也。弘道の館は、何の爲に設くるや。恭しく惟みるに、上古、神聖極を立て統を垂れ、天地位し、萬物育す。其の六合に照臨し、宇内を統御する所以のもの、未だ嘗て斯の道に由らすんば非ざる也。寶祚之を以て無窮、國體之を以て尊嚴、蒼

生之を以て安寧、蠻夷戎狄之を以て率服す。而して聖子神孫、尙ほ肯て自ら足れりとせず、人に取りて以て善を爲すを樂しむ。乃ち西土唐虞三代の治教の若き、資りて以て皇猷を賛く。是に於て斯の道愈々明かにして復た尙ふる無し。中世以降、異端邪説、民を誣ひ世を惑はし、俗儒曲學、此を捨て彼れに従ひ、皇化陵夷し、禍亂相踵ぎ、大道の世に明かならざるや、蓋し亦久し矣。

我が東照宮亂を撥め、正に反し、尊王攘夷・允武允文、以て太平の基を開く。吾が祖威公、實に封を東土に受け、夙に日本武尊の人と爲りを慕ひ、神道を尊び、武備を繕ふ義公繼述して嘗て感を夷齊に發し、更に儒教を崇び、倫を明かにし名を正し、以て國家に藩屏たり。爾來百數十年、世々遺緒を承けて、恩澤に沐浴し、以て今日に至る。則ち苟くも臣子たる者、豈に斯の道を推弘し、先德を發揚する所以を思はざるべけんや。此れ則ち館の設けられたる所以也。

抑々夫の建御雷神を祀るは何ぞや。其の天功を草昧に享け、威靈を率土に留むるを以

て、其の始に原づき、其の本に報る、民をして、斯の道の繇りて來る所を知らしめんと欲すれば也。其の孔子の廟を營む者は何ぞや。唐虞三代の道、此に折衷するを以て、其の徳を歎み、其の教を資け、人をして、斯の道の益々大にして、且つ明かなることの偶然ならざる所以を知らしめんと欲して也。嗚呼、我が國中の士民、夙夜懈らず、斯の館に出入し、神州の道を奉じ、西土の教を資り、忠孝二なく、文武岐れず、學問、事業、其の效を殊にせず、神を敬ひ、儒を崇び、偏黨あること無し。衆思を集め、群力を宣べ以て國家無窮の恩に報せば、則ち豈に徒に祖宗の志を墜さざるのみならんや。神皇在天の靈、亦將に降鑒せんとなす。斯の館を設けて、治教を統ぶるものは誰ぞ。權中納言從三位源朝臣齊昭也。

非常時の指導原理

如上、『館記』の文章は簡潔ではあるが、含蓄するところが相當に深い。『館記』の中に含ま

れてゐる種々の道徳的要素は、「道」の一語で統制せられる。

道とは、自然界・人間界を一貫し、支配するところの根本理法であるが、これを日本民族的な意味にあてはめると、皇道である。この皇道こそは、日本獨自の存在で、そのもとに一切の道徳的要素を統御する。之が態度は、中正公明で、(一)忠孝一本(二)文武調和(三)學問事業一致を認め、政治上では祭政一致の旨を、學問上では儒學を、宗教上では、神道を重んずる。かうして、國體發揮と國體擁護とに力め、由來、水戸學派が反國體的としてゐる佛教・キリスト教を排斥するといふのである。かう手短かに云へば、單純なやうだが、以上に含まれてゐる意義は、日本士民に取つて、最も重要である。東湖の『述義』は、左様した意義の闡明をなすについて效果的だった。

如上の原理から發展して、國體美を力説し、思想統制を説き、國防の充實、陸海軍の一新日支同盟の必要、神道敬重の精神を説いたのが『新論』だった。『新論』によつて、當時の士民は、はじめてその向ふべきところを知り、その爲すべき任務を知つた。即ち外交國難・政治

國難・經濟國難を一掃し得べき捷徑がそこにある。水戸政教學派は、かく非常時の指導原理を提示し、對策を主張した。

かうした叫びは、ひとり、全國の教育界に波動を及ぼしたばかりでなく、思想上、薩長土肥などの雄藩に、政治上のイデオロギイを供給した。その結果、皇政復古、明治維新の幕が切つておとされたのである。そこに、水戸政教學の思想的貢獻の偉大さが、おのづから證明されてゐる。それ故に、超非常時の現代日本は、その適切・確實なイデオロギイを要望しつゝある時に當り、水戸政教學及びその中心人物たる幽谷・正志・東湖らの思想・人物を知るべき必要がある。單に教學上から考へるにしても、そこに有力な指示を爲すところがある。よし、それを鵜呑みにすることは、時勢が許さぬにしても、希望の道・光明の世界を見出すべき捷徑の一つがそこに存すべきことを疑ふの餘地はない。

水戸政教學の再吟味・再検討は、當然、幽谷・正志・東湖らの生涯を回顧することから始められて、然るべきである。

藤田幽谷

第一章 藤田幽谷の生涯（上）

天才と稱せられた幽谷

水戸政教の土臺を略ぼ作つた藤田幽谷は大西郷を心服せしめた藤田東湖の父である。かく傑出した父、傑出した子を合せ見るといふことは、藤田家の誇りたるのみならず、また水戸の誇りである。

幽谷の生涯は、東湖ほど、花々しくはない。寧ろ質實である。その詩文も亦東湖ほど、大衆的などころがない。より多く學者的である。蓋し幽谷は、徹頭徹尾、學者であり、思想家であつた。その學殖・識見は、東湖に優るとも、劣つてはをらぬ。或は、幽谷の方が一段、上にあると思はれる。

彼れは、天才だつたが、また努力の人でもあつた。が、その實力に相應した地位を得ない

で、晩年は、不遇だった。それは、彼れが餘りに硬直で、一步も自説を曲げやうとしないからである。従つて、十分にその手腕を發揮しないで世を去り、東湖ほどに、有名でない。けれども彼れは學者として、水戸における第一人者だと云はねばならぬ實力の所有者だった。

在來、幽谷の佛を傳へたものとして有力なものが二つある。一つは、門下を代表するところの會澤正志齋が書いたといふ『幽谷先生、次郎左衛門藤田君墓表』で、今一つは、東湖が執筆したといふ『先考次郎左衛門藤田君行狀』である。惟ふに、思想・學說の上からは、正志ほど、よく幽谷を知りぬいたものはない。それ故、正志が傳へた幽谷は、學者としての面目を最も鮮かに示してゐる。それから東湖が描いた父幽谷は、率直にそのプロフィールを再現してよく眞骨頭を傳へてゐる。それは共に、簡略にちかいが、いづれも名文章たるを失はない。

幽谷は諱を一正、字を子定といひ、通稱は與介、後、次郎左衛門と改めた。その祖先は、小野篁から出たと傳へられてゐる。

最初、幽谷の祖先は、武藏から常陸に移り、那珂郡飯田村に居住したが、後、水戸城下の

下谷町に移り、父與右衛門は、商業を營んだ。幽谷は、幼少の時から、氣象が、しつかりして、聰明だったが、一向、學校を好まないで、群兒の大將株となり、日夜、遊戯にのみ耽つた。

それを憂へた母根本氏は、病中、懇ろに訓戒を加へ、切に勉學を勧めたので、茲にはじめて、心眼を開き、爾來、全く讀書に没頭した。それは、幽谷十歳の時である。

程なく、母が世を去ると、幽谷は、在來の不孝を悔んで、その死を憾み、益々身を慎むやうになつた。當時、幽谷は、青木侃齋に師事して、四書、五經を誦讀したが、それも數箇月経たぬうちに讀方を卒業し、十一歳の時には、大人らしい詩を作り、十三歳になると、立派に漢文を綴つた。

この時、出來た一つが『長久保赤水七十壽序』で、内容といひ、文章といひ、到底、少年の手になつたものとは思へない。茲に至つて、彼れは、神童と稱せられ、誰も彼も、幽谷の前途に深く囑望した。その結果、侃齋の勧めにより、當時、水戸の學界に最も重きを爲して

るた立原翠軒の門に入ったのである。

東湖の傳ふるところによると、幽谷の父、與右衛門(安善)は、器局が大きく、頼母しいところがあつた。それ故、彼れの師、高倉某は、與右衛門をして、水戸藩士たらしめようと思ひ、一刀を授けて、この旨を傳へた。が、幽谷の父は、考へるところがあつて、祿仕することを好まず、商人として生活した。

然し乍ら、與右衛門は、決してその舊師の厚情を忘れなかつたので、幽谷が長ずると、水戸藩に仕へしめようと考へた。依てこの事を少年時代の幽谷に説き、親戚のものも亦言葉を添へたが、幽谷は容易に聞き入れない。蓋しその抱負は、區々の一小吏たることを潔しとせぬからである。

が、民間の學者として起たうといふ考へは最初から幽谷の胸にあつたらしい。當時、幽谷は父が度々、勸めてやまぬ儘に、表面、志を屈したやうにして、水戸に仕へるべきことを承知したが、これは、一時、父を失望させぬためであつた。

父は一向、そんな事を知らず、ある日、二三の老吏を呼んで馳走し、幽谷を紹介して、周旋の勞を執らんことを依頼しようとした。が、幽谷はいつの間にか姿を晦まして何處を探してもをらぬ。そのため、父の計劃は、一旦、水泡に歸して了つたことがある。

文名一時に揚る

當時、幽谷の學業は著しく進み、その才名は、水戸において、漸く知られて來たので、水戸學中興の名君といはれた文公(二四一一―二四六五)は、翠軒の言に聞いて、幽谷を拔擢し、彰考館生員に採用した。時に幽谷は十六歳だつた。その年(寛政元年)幽谷は、立原翠軒に伴はれて江戸に遊び、始めて柴野栗山(二三九六―二四六七)・太田錦城(二四二五―二四八五)・吉田篁墩(二三九一―二四五八)らと交り、一段と才名を高めた。

滞在一ヶ月の後、水戸に歸り、一層學問に身を入れた。時に寛政三年の頃、當時、幕府の執政として有名だつた白河樂翁(松平定信)(二四一八―二四八九)から、特に文辭を徵せらるる

の命に接した。これは、十八歳の青年としては、正に空前の榮譽だといはねばならぬ。

蓋しそれは幽谷の才器に望みをかけたからで、或は、樂翁公が、幽谷を幕臣として用ひようといふ内意があつた爲めとも解せられる。

それ故、この事を耳にした人々は、いづれも、幽谷のために、立身の好機が来たことを喜び、「貴君の材能は非凡だ。區々、一番に仕へて終るべきではない。苟くも天下に志があるなら、幕臣となるに越したことはなからう。白河侯(樂翁)は新たに幕府の大老となり、人材を抜擢することに努めてをられる。貴君の文章を求められたのも、つまり、その意味からであらう。それは、千載一遇の秋ではないか」と云つた。

が、幽谷は笑つて何とも答へなかつた。そこに彼れの非凡性の閃きが見える。

やがて彼れは、『正名論』一篇を書いて、白河侯に奉り、日本の國體を説き、君臣の大義を明かにすることにより、聊か侯の厚意に酬いたのである。

本來、白河侯は、幽谷の材能を愛して、これを幕臣たらしめようと思つたらしい。が、幽

谷の『正名論』のうちには、力強く、明快に皇室中心主義を高調して、ともすると、幕府の覇政を是認しないらしい口吻があるので、躊躇した。唯幽谷の才器を賞揚するに留めたのである。

それにしても、この事は、幽谷の文名を一段高める原因となつた。従つて、文公も亦幽谷を愛して、度々召出し、詩文を作らせた。彼れの筆は、非常に早く、而もその出來榮えがよかつた。が、その志すところは、經國の大業にあつて、詩文の末技にはなかつた。文公は、幽谷の考へを壯とし、恩遇、一層の厚きを加へたのである。

幽谷時事を憂ふ

それから程なく(寛政三年)幽谷は、十一月下旬、その父の卒去に會つた。彼れは非常にこれを悲しみ、顔色もやつれるに至つた。蓋し幽谷は曩きに慈母を喪つて、風樹の嘆が深く、その遺誠を忘れないで、日夜、學問にしたしんで來た折柄、父の死を見たから、悲しみのど

ん底に沈んだのである。

彼れは、哀痛の誠意を地下の父に表するため、平生、讀んでゐた『禮記』の旨により、三年の心喪に服することとした。その時分、世間では、父母の喪に籠ること五十日間で、平生に復するといふ制規があつたが、それさへも、事實、行ふものが極少かつた。

それ故、幽谷は、さり氣なく、世俗の爲すところに従ひ、五十日間の喪に服したが、家にゐるときは、『禮記』に記されてゐるやうに、「苦に寝ね、塊を枕とす」の意を守り、宴席に出ず、慶弔を絶ち、詩文も作らず、酒肉をも口にしなかつた。

かうして朝夕、亡父の靈前に禮拜した。その哀悼の誠を現はした姿は、深く周囲の人々を動かした。この際における感想を述べたのが『二連異稱』で、古人が固く服喪の精神を守つた事例を東西に亘つて擧げ、喪制の得失、長短などを論じた。これは、幽谷の歿後、門下の會澤正志により、刊行されたのである。

その後、寛政七年、幽谷は立原翠軒に従つて、京都地方に赴き、漣ゆるき琵琶湖上に舟を

浮べ、東海の空に聳えた富士の高根に起ち、氣分を一新することが出来た。かうして幽谷は元氣に満ちて、水戸に歸り、翌八年邸宅を梅巷の東隅に賜り、下谷から引移つたのである。この際、先春及び困學などいふペンネームを作つた。やがて寛政九年、夫人丹氏を娶り、新家庭に和樂した。

當時、江戸文化は、進歩の頂點に近付き、國民は、なごやかな氣分で、平和生活を享受してゐたが、事實、幕府の政治も、各藩政も漸く行詰り、加ふるに、外交國難の兆候が漸く現はれてゐた。時代は、次第に艱險を加へはじめたのである。

従つて炯眼な幽谷は、藩主文公の慈仁、恭儉に心服はしたが、要路に當る士が私を營んで文公の志を遮りつゝあるのを憤つた、率直な彼れは、左様した弊害をちつと傍觀してゐることが出来ないで、直ぐに上書しやうと考へた。

が、まだ二十四歳で、位置も低いため、到底、その目的を達すべき望みがない。それ故、彼れの所懐を先づ先輩、長久保赤水(二三七七—二四六一)に告げ、水戸の支藩、宍戸侯によつ

て、文公の耳に入れやうと考へた。これは、幽谷が江戸在勤時代のことである。

幽谷の衷情を諒とした赤水は、心から同情して、その時事を論じた文章を宍戸侯の手もとに差出した。ところが、侯は幽谷の論するところが、餘りに過激で、必ず罪を得べきことを察し、それをその儘、手もとに留めて置いた。そして一書を長久保赤水に與へ、幽谷を懇諭すべき旨を傳へたのである。

以上の旨をそれと知つた幽谷は、一層、憂憤し、再び書を赤水に與へて、時事を切論すると共に、是非、彼れの主張を文公の耳に達しやうとあせつた。けれどもこの際も亦その目的を達することが出来ない。

茲に至つて、幽谷はひどく失望し、煩悶した。

彼れは時々、文公の講筵に侍して、經史を講じたり、道義を説いたりして、度々、直言したことがある。が、幽谷の立場から、考へると、それは、句々たる章句の間に踟躕するにすぎない。本來、彼れの志は經綸の上にある。天下の政治を料理する點にある。けれども現在

は、萬事、思ふやうにならぬので、不平の氣を酒によつて、まぎらし、時に激飲して、矯激な言動を爲すことさへもあつた。

幽谷と『大日本史』

が、決して自棄したのではない。

その切實な憂國の一念は、燃えて炎の如く、到底、いつまでも沈黙することを許さぬ。それ故、宍戸侯の懇諭を知りつゝも、寛政九年、封事を文公に上り、藩政の缺陷を各方面から鋭く指摘して、權を弄ぶ私臣の反省を促した。果然、宍戸侯の豫察した如く、その言葉の過激な爲めに、忽ち嚴罰に處せられ、すぐ職を奪はれて、國許へ追ひ還されたのである。

爾來三年間、幽谷は、閉居して客を謝し、社交にも出ず、専ら讀書、講學に努めたのである。『水藩修史事略』(栗田勤著)によると、『修史始末』は、幽谷、二十四歳の時に成つたとあるから、閉居を命ぜられた年に當る。それは閉居前になつたと思はれるが、『幽谷全集』の年

譜を見ても明かでない。が、『修史復古紀略』の著者、岡崎正忠（幽谷門下）の言によると、『藤田先生江邸寓居の日録する所なり』とあるから、確かに江戸詰の時に書いたものと思はれる。この書は、『大日本史』の編修経過とその中心思想とを知る上に、缺くことの出来ない重要な文献である。そこには正保二年から寛政九年迄一百四十二年間に至る要項が簡明に記されてゐる。

それから、幽谷が閉居、謹慎を命ぜられる前、修史上の事について直言したことが、やはり、『水藩修史事略』のうちにある。それは、『大日本史』の題號を定めるについて、幽谷の所信を披瀝したのであつた。蓋しそれは、水戸藩自身において、『大日本史』の題名を附するとは、穩正を缺くものとしたからである。彼等は、その中で「天朝號を建て、日本と曰ふを聞けり。未だ其の大日本と曰ふを聞かざるなり」と確言して、不可とする理由四箇條を擧げ、且つ、不當と考へた重要點に觸れて、「これ固より一家の私書、朝廷問はず、今先づ天闕に奏せずして、私に之を板に鏤ばめ、公然、號して大日本史と曰ふ。其の朝廷を蔑ろにす

る、豈、崔浩、圖書を作るの比にあらずや」と直言したのである。

蓋し幽谷は、朝廷に對する禮儀について深く慎重の態度、謹嚴の心持を具すべき必要あることに想ひ到り、その題號の如きも、朝廷の御許可を仰ぎ、その思召に隨順すべきを至當としたのである。

當時、その議は、未だ用ひられず、曾て安積澹泊（二三一六—二三九七）が命名した『大日本史』の題號をその儘にして置いたが、後、幽谷の言は容れられ、改めて朝廷の御意を奉伺して、『大日本史』の題號を賜はるに至つたのである。

以上によつても、幽谷が義公の精神を尊重して、『大日本史』の内容その他を完全なものたらしめようとして、銳意したことが分る。

幽谷の育英事業及び修史

爾來閉居三年の後（寛政十一年十二月）彼れは、漸く赦に逢つた。やがて元の如く、彰考館

勤務となり、編修事務に勵精した。それは、二十六歳の時である。

その後、二年の日子は、夢のやうにすぎた。

やがて享和二年、二十九歳になると、學舎を作つて、青藍社といひ、子弟をあつめて儒學その他を講じた。幽谷の學殖・文才は、夙に一藩の知つたところであつたから、從遊する青年は漸く多かつた。

かうして彼れは育英事業によつてその胸中磊塊の氣を洩し、古今の思想・學説を論じた。幽谷平生の主張が他日、大に伸びたのは、主として青藍塾の人々が、思想上に活動したからである。

時にその年(享和二年)十二月、幽谷は急に文公の召命に接し、あはたゞしく、江戸に上つた。十八日、小石川の藩邸に着くと、二日の後、すぐに文公に謁することを許された。

蓋しその頃、文公は、義公の遺志を繼いで『大日本史』の完成に力を注がうと思ひたち、第一に幽谷の手腕・力量に最も多く期待したのである。當時、本紀・列傳は出來てゐたが、志

表の方面が兎角、遅れ勝ちになり、之を取纏める上に、特別の力を注がねばならない。それ故、幽谷の文才・學識に俟たねばならないところが少からずあつた。

かくて幽谷は、當日(十二月二十日)史臣高橋坦室(二四三—二四八三)らと文公の下問に接し、詳しく、修史の趣旨及び中古以來の歴史を述べ、且つ史館の沿革についても話説した。次いで幽谷は、文公の命を受けて、『大日本史』刊修のことを囑任されたのである。

その際、幽谷は、「不肖その任に堪えませぬ。他に適切な人をお用ひありたい」と再三、固辭したが、許されない。依て彼れは率直に當面の感想を披瀝し、「水戸では、現在、老儒、宿學に乏しうございませぬから、私のやうな、年若く、才識の少いものが大切な修史事業の局に當るのは、僭越且つ不當と存じます。何卒、臣の申すところを嘉納せられ、先輩を重用せらるるよう、只管願上げ奉ります」と至誠を面に現はして言葉をつくした。

文公は、その旨を諒としたが、他に適材がないので、結局、幽谷は、高橋坦室と共に『大日本史』志表編修の局に當ることとなり、翌年(享和三年)江戸に移つて、この方面の仕事に

全心を打ちこむに至った。

幽谷が史館在勤中、尙ほ記すべきことは、(一)史臣高橋坦室が文公の存意として、論賛削除のことを主張・建言したについて賛意を表したこと、(二)修志繼續の議を決定した上などにある。元來、『大日本史』の論賛は、支那の『史記』の體裁に倣つて、安積澹泊が起草したものである。それは、文章・内容共に立派であつたが、一家の私撰たる『大日本史』で皇室の上と言及したり、或は褒貶の意を朝廷に加へたりするのは穩當でないといふ評判があつた。文公は、この點を憂ひ、論賛削除を必要としたのであるが、高橋坦室は、この點に共鳴して、旨意を上書したのである。之について幽谷も、「事に據つて直書すれば、勸懲の意がおのづから現はれる。之を論賛に俟つの必要はない」と坦室に告げ、賛意を表したのである。この事は、後、實現されて、『大日本史』から論賛を削り去つた。

それから修志の事は、義公時代からの根本精神で、本紀・列傳と相俟つて、文明史の役目を全うするといふ意味を以てゐた。それ故、文公は、是非、志類を編修すべき必要を感じ、

立原翠軒・高橋坦室及び幽谷らを召して、その旨を傳へた。ところが、翠軒は、後、紀傳の完成・上木を主として、志類を廢すべき説を主張したのである。史臣の多くは、之に反對し幽谷も、公議の上から、止むなく、この説に反對した。双方、論議の末、幽谷の主張は容れられ、志類編修のことに決した。が、之がために、爾來、幽谷派と翠軒派との對立・抗争を見るに至つた一主因を爲した。

その後、文公薨じて、武公(二四三三—二四七六)の時代となつたが、幽谷は、益々重用せられ、文化四年、彰考館總裁の椅子に就いたのである。

第二章 藤田幽谷の生涯（下）

幽谷の藩政に對する貢獻

文政五年、幽谷は、彰考館總裁の職にゐたが、濱田郡奉行を兼ね、暫く外に出ることとなつた。それは三十五歳の時である。これより先、彼れは貧しい農民らを救ふために、寛政十一年、『勸農或問』上下二巻を書き、支那經濟學の原理ともいふべき利用・厚生・正徳の意義を勸農の上に發揮した。その中には、富める農民の兼併の弊害を論じ、限田法の必要を力説した。即ち富めるものが無暗に貧農の田畠を併合して、我儘を働くことを排したのである。

かうした關係から、幽谷が濱田郡奉行になると、平生の所信を直ちに行はうと考へ、限田法の實現に邁進しようとした。が、之を濱田郡で實行すると、他の郡にも、少からぬ影響を及ぼすといふので、手強い抗議が外部に起つた。その爲め、幽谷は、所信を實行することが

出来ないで、不満の中に、郡宰の職を辭したのである。

かうした關係から、幽谷は、再び水戸の史館に歸つて、編修事務を總裁することに専ら力を注ぐやうになつた。そして文化十年、江戸に召出されて、『大日本史』の件につき、種々議論するところがあつた。滯留數箇月の後、水戸に歸つたが、當時、彼れは、武公の信任を受け、通事の職に進んだのである。幽谷はその知遇に感じ、武公のために、熱心、政弊を一掃して、革新の實を擧げようと鋭意した。

蓋し武公は、度量が大きく、よく臣下の諫めを容れ、政治上、肅清の實を全うしたいと考へてゐたのである。依て幽谷は、率直にその信するところを述べたが、要路の諸臣は、偷安・姑息を喜んで、幽谷の直言を蛇蝎のやうに忌み、折さへあれば、幽谷を敬遠しようと思つた。

この消息は、武公も能く知り、力めて、幽谷の直進しようとするのを抑へて、彼等小人の畏にかゝらぬやう、幽谷にも親しく諭すところがあつた。こんな具合だから、幽谷はその満

腹の經綸を何處にも施すべき術も、折もなく、止むを得ず、修史方面に力を專注しつゝ、ちつと不満の感情を抑へてゐたのである。

左様したうちにあつても、幽谷は、尙ほ前途に一縷の光明を認め、武公によつて、政治上における改革を實現して、行詰つた藩政に新生命を注入しようと思つた。ところが、文化十三年、頼みの綱と思つてゐた武公が薨じたので、折角の志も水泡に歸して了つた。當時、幽谷は泣いて「天は未だ威公・義公の意志を十分に實現することを許さぬのであらうか。有爲なわが君の生命を奪ひ去る事が、餘りに早すぎるではないか」と浩嘆したと傳へられる。

やがて哀公(二四五七—二四八九)の時代になると、幽谷は江戸に召出され、その初政について、いろいろ獻策した。當時は所謂大御所(徳川家齊)の時代で、平和の空氣が濃厚であつたと同時に、頽廢の氣が到るところに満ちた。幕府においては、賄賂が公行して、風俗も大分くづれ、萬事、情實によつて左右さるゝやうな具合になつてゐた。

水戸の如きも、左様した惡影響を免れることが出来ぬので、剛健、質實の士風も次第に軟

化しはじめやうとした。幽谷は、心竊かにこれ憂ひ、斷乎として、陋俗・軟風を打破らねばならぬと切思したのである。

幽谷が憤慨した外人の跋扈

折柄、一方では、外交國難が漸く深刻さを加へて來た。文化五年には、イギリスの船が浦賀に來り、同七年には、東海方面に出沒して、輕舸を下し、その一隊のものが常陸北郡大津村の海岸へ姿を現はしたのである。それと見た村民は、すぐ彼等を捕へ、官に届け出た。

この事が、イギリス船に知れると、度々、帆をあげて海岸に近付き、時に大砲を放つて、海邊の民を驚かし、人心恟々たる有様だつた。

以上の趣が幕府の耳に入ると、代官、古山善吉、通譯吉雄忠次郎らを大津村に派遣した。その時、「外夷が侵入した」といつて、非常に激昂してゐた水戸士民は、幕府が攘夷令を斷行して、イギリス船を焼き拂ひ、イギリス人を誅するであらうと思つてゐた。ところが、古

山らは、寛大な態度を以て彼等に臨み、間もなく、イギリス人を放免したので、ひどく失望して了つたのである。

これより先、幽谷は、右の事情を聞いて、心から慨嘆し、突如、傍らにゐた息、東湖に向ひ、「お前は死ぬのは嫌か」と聲をかけた。その意外な言葉を耳にして、東湖は一寸、首を傾けたが、やがて凜とした調子で、「私は決して死を恐れませぬ。が現在、父上がをらるゝ以上日夕、お側にをりたいから、無意義に死ぬことを好みません。けれども父上が今、意義あることのために死せよと仰せらるゝなら、立所にこの生命を捧げませう」と答へた。

かくと聞いて、幽谷は双眼に暗涙を浮べ、「今、お前の快い返事を聞いて嬉しく思ふ。實は、こんなことをいふのは、外でもない。この頃、年々、外夷どもが、わが神國日本の邊海を荒らし廻り、時には、大砲を鳴らして、無邪氣な漁民を驚かして、得意になつてゐる。且つ彼等は、日本を侵略しようといふ野心を抱いてゐるのだ。實に傲慢、無禮の至りではないか」と幽谷は激昂したが、更に語氣を強め、「彼奴らに向つては、當然、攘夷令を適用して

これを懲殺しなければならぬのに、幕府當局は、姑息に甘んじて、唯一日の安を貪り、嚴重に彼奴らを處分しようとしなない、大抵の場合、放還するのが常だ。こんなことでは、わが神國日本に一人の男子もをらぬといつて差支へあるまい。何たる腑甲斐なきことか。自分は何よりそれを恥ぢ、それを憤つてゐる。依て今、イギリス人が大津の濱へ來た機會を逃さず、汝を派遣しようと思ふのだ」と云つて、胸中、動かすことの出來ぬ決心を示した。

東湖に告げた幽谷の胸中

東湖は、父の様子を見て、吾知らず緊張した。幽谷は、それと見て、満足らしい調子で、「汝はこれから大津の濱へ出かけて、そつとその邊の様子を偵察し、萬一、今度も亦、イギリス人を放免するが如き處置を執るなら、斬つて斬つて斬りまくれ！そして上陸したイギリス人を殺して了ふがよい。かく目的を達したら、官に自首して制裁を受けるべきだ。それは一時の權宜だが、神州の正氣を發揚することが出來よう。自分は不幸にして女子が多く、



男子はお前ばかりぢや。お前が亡くなれば繼嗣を失ふわけだが、國家のためには、それも止むを得ないと覺悟した。お前は後事を氣にせず元氣よく出かけてくれ」と勵ました。

かうして東湖は、「委細拜承いたしました」と云つて、急いで出かけようとするところへ飛報が來た。

「イギリス人は放免された」

といふのである。この時、幽谷の憤りは、正に絶頂に達した。「こんなことでは、斷じていけない。どうしても、神州の恥を雪がねばならぬ。また水戸の恥をも雪がねばならぬ。大津は、水戸の領地で、そこには、防備が施されてをり、わが將士がこれを守つてゐるのだ。そして今度の大事を生じたについて幕府に急告したに對し、當局では、唯一介の使を派して軽々しく一切を處置したのは、言語道斷である。水戸の君公や、老臣らがその不當について何ら抗議しないのは奇怪至極でないか。自分は之を默視してをれない。これから出かけて、途上に幕使を擁し、大義のあるところを、説いて詰責しよう。もう濟んで了つたことは、致

方がないとしても、神州の元氣を振ひ興す一助とならう」と考へた。

それから幽谷は、藩の執政、興津氏のもとへゆき、意のあるところを告げた。が、當事者は、幽谷の考へと同じでない。「外交の事は史臣たちの容喙を許さぬ」と云つて、幽谷の請ひを撥ね付けた。けれども幽谷は尙ほ屈せず、史上の事例を引いて、堂々、大義の存するところを説き、彼れの主張の正しいわけを明かにした。

かうなると當事者も、幽谷の主張を無視するわけにゆかぬので、幽谷に向ひ、その感想を記録して差出すやう命じた。この事について、幽谷は、家に歸つてから東湖に所懐を告げ、「古來、武士が命を受けて、他國へ使者として赴くときは、唯命令を受けるに留まり、その言葉のすべてについて、必ずしも指令を受けぬ。要するに、相手に應じ、機に應じて、按配斟酌するのだ。ところが、今はじめからそれを定めてかゝるやうな行き方を藩において爲すのは、矛盾ぢやないか。然しながら、事、國家に關する以上、出来る丈、自分も盡さねばならぬ」と云つた。

かうして幽谷は、徹夜、その主張を記録し、藩の當事者へ差出したのである。が、當事者は躊躇して、容易に幽谷の文書を幕使の前に差出さうとしない。その中、時の移りゆく儘に、幕使は城下を通りすぎたので、もうどうすることも出来ぬ。折角、幽谷の心づくしも、丸で晝餅に歸したのである。

幽谷の對外策

その後、幽谷は、外交國難排除について、始終、心思をつくし、その對策に關し、率直に建言しやうとした。が、當局では、平地に波瀾を起すやうに考へ、一向、幽谷の爲さんとするところに共鳴しない。かうして、幽谷はその對外硬の精神を實現することが出来なかつた。

唯せめてものこととして、聊か幽谷自ら慰むるところがあつたのは、對外硬の考へを門下らに告げて、彼等の奮發を促し得た點にある。この事について、幽谷は、その所信を披瀝し「苟くも神國日本を守るには、その軍隊を強からしめねばならない。それには士民をして勇

あらしめ、嚮ふところを正しく知らしめることを要する。若しよく時勢上、懦弱を好むの弊害を去り、仁義を重んじ、名節を尊ばしむるならば、士民は、喜んで長上のために一命を投げ出すであらう。今、ロシアの日本侵略策は、年一年、巧妙・適切になつてゆく。それに對しては、受身になつてはいけない。當方から積極的に彼れを屈せしめねばならぬ」と云つてゐる。

それから幽谷は、一步を進めて、「かの寛永における天草一揆の如きは、まだ戰國時代を去ること、遠からぬ際に起り、到るところ、極めて物騒だつた。平生、手剛い大小名などはこの事につけ込んで、野心を逞しうしやうと考へ、驍將や悍卒などの中には、疊の上で死ぬのをいやがる風さへある場合だつた。故に幕府は靜的態度を執り、一揆を鎮めたのである。ところが、今日は左様いふ場合とはちがふ。多年の平和のため、士民は宴遊に耽り、士風は軟化して了つた。だから、たとひ、勇氣を鼓舞・作興しても、尙ほ振はないであらうことに注意しなくてはならぬ」と云つた。更に幽谷は、かう述べてゐる。

昔、元寇の役に當り、北條氏は、斷然、蒙古の使節を斬つて、日本政府の威容と決心とを示し、天下を擧げて、強大な蒙古を相手とする用意をした。それ故、人心、おのづから内に奮ひ立ち、舉國一致の實をあげて、十萬の敵を西海に殲すことが出来た。今、外夷どもが、わが日本へ使を派して爲すところを見ると、或は、甘言・好餌を以て我を誘ひ、或は恫喝・威嚇を事としてゐる、かかる權變を以て、我に向ふ外夷らを扱ふには、生やさしい態度を以てすることが出来ない。何となれば、そのため、神國日本の士氣を損するからである。

かう幽谷は考へて、硬直な態度のもとに外交國難を一排しやうと熱中した。そこに、幽谷の燃ゆるやうな祖國愛の精神が閃めいてゐる。

かうした誠實・硬骨の士は、兎角、妥協を事とし、偷安を欲するの時代には容れられ難いところがあつた。惟ふに、幽谷は、先憂後樂の國士で、早く時勢の動きを知り、人に先立つて時艱を憂ひ、人に遅れて成果を樂しむといふ風があつた。かうした人こそ、國家に取つて

も、一藩に取つても有用である。

が、幕府に人なく、藩内に炯眼の士がなく、幽谷の熱情と識見とを理解しないで、徒らにその剛骨を忌み嫌つたのである。そのため、晩年の幽谷は、殊に不遇であつた。それは、先覺者に免れ難い運命であるけれども、幽谷のやうな偉器を以てして、かかる境地に沈まねばならなかつたことは、深く悲むべきである。

晩年の幽谷

その後、文政九年、幽谷は、修史のことについて、江戸に召出された。その際、史館の人々は、頻りに幽谷を江戸に引留めやうと力めた。ところが、彼れの硬骨を忌むものは、極力之に反對した。東湖は、この事を後に「小人力を出して之を拒む」と書いた。それ故、幽谷は、また淋しく、水戸に歸らねばならなかつた。やがて幽谷が用務を終つて、歸藩しようとする、哀公は慰勞のつもりで、幽谷及び史館の人々を後樂園の涵徳亭に招いて宴を開き、

特に硯を賜った。

その際、哀公は頻りに幽谷を慰諭し、「二三年は辛抱せよ、再び汝を召出す折がくるであらう」といふ意を告げた。幽谷は、深く哀公の温情を感謝した。

やがて宴終つて、君前を退出すると、幽谷は東湖に向ひ、「君公の御恩は深くして厚い。公は二三年、辛抱せよと仰せられたが、恐らく、自分は再び哀公に謁して、君恩に酬いませることが、むづかしからうと思ふ。だから、お前はこの父に代つて、特に忠誠をつくさねばならぬ」と訓諭した。

それから幽谷は、また語を継ぎ、「何といつても、人間には、學問が一番大切だ。江戸はこの點において、便宜が多いから、お前は當地へ留つて、十分に勉強するがよい」と呉々も教示したのである。この時、幽谷の語調は、何となく、沈んでゐた。蓋し以上の言葉が、東湖にとつて、永訣を告げる最後の訓戒となつたといふことが、後で分明つた。

水戸に歸つてから、幽谷は、不遇の地位にをりながらも、尙ほ奉公の誠を守り、やがて辭

職して閑地に着いたら、専心、著述に没頭しようと思へた。ところが、俄かに中風を病み、文政九年十二月卒去したのである。時に年五十三。

蓋し幽谷が比較的早く世を去つたわけは、不遇を飲酒にまぎらして、不知不識のうちにひどく健康を害ねたからであつたらう。封建治下の門閥主義で固められた世にゐては、幽谷の如く、卓抜の見識を有し、所信に向つて、只管進まうとするものは、到底、容れらるべき餘地がない。且つ彼れの晩年の不遇は、彼れが周圍にその有力な知己を得なかつたことにもよるところが多かつたであらう。

東湖及び正志の語るところによると、幽谷の人物は、豪邁で、嚴正だつた。正志の碑文中に「狀貌奇偉」とあるから、風采だけ見ても、非凡人たることが分る様子だつた。彼れは平生、少しも、その容をくづさず、冬期は寒いからと云つて、爐を擁して、あぐらをかくことなく、夏期は暑いからといつて、肌をぬぐやうなこともなかつた。それ故、幽谷夫人は、殆ど三十年間、一緒に暮したが、一度も、幽谷の情容を見たことがない。

ある時、幽谷の高弟、杉山復堂(二四六一—二五〇五)が幽谷と共に酒を飲んだとき、戯れに「先生、酒宴の時だけは、あぐらをなされては、どうですか。でないと、窮屈ですから……」といふと、幽谷は微笑して、復堂の云ふ儘に膝をくづしたさうである。恐らく嚴正な彼れも陶酔気分になると、自然、打くつろいだのであらう。正志の記述によると、「客に對して酒を命じ、節を撃つて高歌し、以て其の幽鬱の氣を洩す」とあるから、酒間は、例外であつたらう。

幽谷は、四十歳の頃から頭髮が白くなつた。従つて、その奇異の容貌と相俟つて、早くから老大家に見ゆる風格を備へたのであらう。そして彼れは、家を治めてゆくについて、一糸紊れないと云ふやうな點があつた。平生、理財に心を用ひ、學者の陥りやすい浪費をしなかつたので、知人中には、幽谷を吝嗇の人と誤り思つたものもある。が、幽谷は、決して金錢に執着する人でなく、餘財を以て、金に窮したものを救ひ、貧しいものを助けた。かうして彼れの貯蓄は、大方、この方面に注ぎこまれたと傳へられてゐる。

教育家としての幽谷

最後に青藍舎長としての幽谷を素描したいと思ふ。既述した如く、青藍舎を作つたのは、幽谷二十九歳の時である。爾來、五十三歳に至る迄、二十餘年間、門下の人材を養成することに力を盡し、少からぬ名士をその門から出した。彼れの門弟中、嶄然、頭角を現はしたのは、會澤正志齋(伯民)であるが、その他、飛田逸民(二四三五—二五二一)吉田活堂(二四五一—二五〇四)岡崎槐陰(二四四四—二四九一)吉成南園(二四五七—二五二〇)杉山復堂など、水戸政教學に貢献した人たちがゐる。

幽谷の教育法については、正志の『及門遺範』にその要領を書いてあるが、詳しく、その面に觸れるところ迄にはいつてゐない。總じて、幽谷は、徳育を第一位に置き、次ぎに智育に及んだ。それと共に、徳育を施すについても、抽象的なことのみを云はないで歴史上の事實を教へて、之を具體化してゆく用意を怠らない。且つ「いかに書を読むべきか」といふ點に

ついでには、幽谷自身の経験によつて之を説き、人物を養成してゆく大體の方針を速成主義よりも、晩成主義に置いたのである。

それらによつて見ても、幽谷が當時の固定した保守的教育法に甘んじないで、彼れ独自の見識に基づき、生きた教育法を行はうとしたことが分る。それに、幽谷は、門下の青少年に専ら學術のみを教へ、時事問題、殊に政治上の事柄は、一切耳に入れなかつたといはれる。蓋し青少年の時代は、感情に制せられて、兎角、政治の得失・是非を論争し、學術の講究を疎かにするの傾向が多いからである。

幽谷の教育法の大體は、以上の如くであるが、その德育における重點は、日本國體の尊嚴を門下一同に明識せしめ、次ぎに忠孝一本の旨を徹底、浸透するにあつた。『及門遺範』にはこの事に及んで、「先生、尤も君臣の義を重んず。恒に人に語つて曰く、天祖統を垂れ、天孫繼承、三器を奉じて、宇内に照臨したまふ。皇統縣縣、天壤と與に窮まりなし。實に天祖の命する所の如し、是れ神州の四海萬國に冠たる所以にして天祖・天孫天と一なり。世々相

襲ぎて天津日高と號す。騰極は之を日嗣と謂ふ。神天合一、殷、周、天と配して尙ほ天と一となるを免れざるものと同じからず。先生の國體を論ずること、其の大旨此の如し」と記してゐる。

當時の教育家は、大抵、支那風の道德を教へるのを主眼とし、幽谷の如く、明確に日本國體の尊嚴を門下に教へたものは少い。そこに、幽谷の優れた考へ方が現はれてゐる。

且つ幽谷は、忠孝一本の旨を教へるについても、唯之を口先きで説いたのではない。彼れ自身先づこれを實踐してから、門下に語つたのである。彼れは、十歳以後、志を改めて、よく兩親に仕へ、父卒したときは、三年間の心喪を守り、また『保健大記』(栗山潜鋒著)を讀んで感奮し、『正名論』の一篇に忠義の精神を力説した。即ち彼れの忠孝説は唯よ加減に體裁を繕ふために説いたのではない。

それから幽谷が教科目を授ける順序として、どんな讀本を子弟に授けたかといふと、初歩のものには第一に『孝經』を授けた。この點は、當時一般の教育家と異つてゐたのである。そ

れ故、『及門遺範』では、「世俗、儒を業とするもの、久しく五山僧徒の陋習を承けて、幼童をして文選を誦せしむ。先生は則ち先づ孝經を授く」と云つてゐる。

それから正志は、『孝經』の次に、四書五經を授けて、大要を知らしめ、門弟らが略々内容を知らると、『史記』『左傳』『國語』『漢書』などを授け、道德と共に史的知識を與へて、活教育に資した。

無論、幽谷は、左様した讀本のみを形式的に教授するの皮相に墮せず。或は親しく、歴史上の美談を語り、或は前賢の詩文を高唱して、門弟の志氣を鼓舞し、或は世界萬國の形勢に説き及び、或は政治法律・禮樂の沿革を語るといふ風で、懇切に門下を導いた。かうして幽谷は、徳育を補ふに智育を以てし、門下の個性に即して、それぞれ快適に發達してゆくやう開發的・實踐的な教へ方をしたのである。

幽谷が教育家として、いかに時流を抜いてゐたかは、以上説くところによつても、その一半を推認することが出來やうと思ふ。『及門遺範』には、幽谷が正志らに告げた言葉を要領よ

く記してゐるが、左様した言葉のうちには、當時、保守的・固陋的な學者たちが、及ぶことの出來ないやうな卓見が閃めいてゐた。

幽谷の言葉のうちで、「學者は君子たらんことを學ぶ。儒者たらんことを學ぶにあらず」といふが如き、或は「古へは文武一途、未だ嘗て分つて以て一となさず」といふが如き、更に「好んで書を読み、甚だ解するを求めず」といひ、「咀嚼の二字は讀書の要訣なり」といひし如き、確かに幽谷の優れた見解を示してゐる。

近世教育史を編むものは、水戸における第一流の教育家、幽谷の存在を明かにしなければならぬ。嘗て水戸學派中、史學方面に傑出した栗田栗里(二四九五—二五五九)は、「世人、東湖先生・正志先生を稱すれども、未だ幽谷先生を知らざるもの多し。幽谷あらずんば、焉ぞ東湖・正志あるを得んや」と語つたといふ。それは、吉田彌平氏(前東京高師教授)が親しく、栗里(寛)から聞いたところである。栗里のいふところは、適切に幽谷の地位を明かにしたものである。幽谷については、まだまだ今後、明確・詳密に研究せられねばならないのである。

○幽谷主要著書

○修史始末(二卷)○二連異稱(一卷)○勸農或問(二卷)○舜典二十八字考(一卷)○孝經孔傳解(一卷)○惟宗氏族考(一卷)○幽谷遺稿(四卷)○讀書雜記(二卷)○幽谷詩集(一卷)○熊澤伯繼傳(一卷)

その他、封事書翰がある。右の中の物は、概ね大正十年刊『幽谷全集』(菊池謙二郎編)に收められてある。が、尙ほ『遷都論』その他、洩れたものもある。

第三章 幽谷の日本國體論

水戸學派の日本國體闡明

幽谷の思想を形造るところの基調を爲すものは、彼れの日本國體觀である。

江戸幕府創設以來、儒學・國學方面において、日本國體の精華を説くものが漸次、加はり來つた。が、これを明確に説いたものは存外少い。

その中で、山鹿素行(二二八二—二三四五)の如き、賀茂真淵(二三五七—二四二九)の如き、何れも比較的國體觀念闡明に貢獻するところがあつた。素行の『中朝事實』、真淵の『國意考』などは、この方面における代表的著述である。

これに對して、幽谷の日本國體觀は、更に一步を進めたものと思ふ。蓋し水戸學派は、早くから、日本國體の尊嚴を自覺し、水戸義公の『大日本史』編修の偉業も、歸するところ、國

史をとほして、國體の精華を發揚するにあつたと云つてよい。

義公は、學者を以て自任しなかつたから、特に公には、國體論といふべきものはない。が彼れをめぐる學者——安積澹泊、栗山潜鋒(二三三〇—二三六五)三宅觀瀾(二三三四—二三七八)らはいづれも、日本國體の本質を自覺して、大義名分主義を高調した。澹泊の『大日本史論贊』、潜鋒の『保建大記』、觀瀾の『中興鑑言』などは、到るところ、日本國體の萬國に卓越する所以を説き、大義名分思想を嚴肅な態度で力説したものである。

従つて、幽谷もそれら先輩の思想から少なからぬ影響を受けた。殊に『保建大記』は、幽谷が最も熟讀した一つで、そこから得た深い感化は、いつ迄も、彼れの腦裡に強く刻み付けられたことを自白してゐる。即ち彼れは、以上の如き人々の國體觀を研究し、知悉して、彼れ一流の考へ方をこれに加味し、水戸學派の中で、曾て見ないほどの明確な解釋を日本國體の上に加へたのである。

惟ふに、日本國が海外諸國と最も異なる點は何かといへば、必然、日本國體を第一に擧げな

ければならぬ。また日本が特に海外に對して、優越な點を把持してゐるところは何かといへば、これ又、日本國體を擧げねばならぬ。西洋崇拜者流のうちには、かうしたことを意識しないで、徒らに他國の文化を羨み、自國を卑下するのを能事としてゐるが、かゝる人々は、自分の家にある大切な寶を知らないのと同様である。

否、その寶を知らないのみならず、却て他の國の寶とするところを羨むの愚にひとしい稚態を示すものと云はねばならない。故に眞に日本民族の一員として、正當に日本國家を護持し、祖國の正當な文化的發表を希ふとするならば、何を措いても、日本國體の優越な所以を明識することが一番、肝要である。

惟ふに、幽谷が日本國體の本質を闡明するに力めたのも、以上の如き考へ方によるであらうが、今一つは、武斷的霸政から離れて天皇政治の確立へ歩を進めねばならぬといふ一個の強い信念に驅られるところがあつたにちがひないと思ふ。

幽谷の『正名論』

かうして幽谷は、その文章の中に、折に觸れ、機に臨んで、日本國體の崇嚴を説き、門下の士に對しても亦これを講説することを怠らなかつた。抑々幽谷が彼れの文章において日本國體の本質を述べたのは十八歳の時、『正名論』を書いた際にある。それは、大義名分即ち君臣の間における最大の義理及び上下の名分を嚴にせねばならぬ旨を中心として論を進めたものであるが、かく幽谷が大義を力説し、名分を高唱した所以は、日本國體を擁護し、發揚しやうとするの至誠に出た。

單に大義名分を説くといふならば、必ずしも、幽谷の説を俟たない。『春秋』においても、『論語』においても、既に明快に述べてある。が、日本國體を護持してゆく必然の信念から、大義名分を論じて、嚴肅を極めたところに、幽谷独自の面目と意義とがある。彼れは、『正名論』において、かう云つた。

赫々たる日本は、皇祖國を開きたまひしより、天を父とし、地を母とし、聖子神孫世々明德を繼ぎ、以て四海に照臨す、四海の内、之を尊んで天皇と曰ふ。八洲の廣、兆民の衆、絶倫の力、高世の智ありと雖も古より今に至る迄、未だ嘗て一日も庶姓の天位を好するもの非ざる也。君臣の名、上下の分、正且つ嚴なる、猶ほ天地の易ゆべからざるがごとき也。是を以て、皇統の悠遠、國祚の長久、船車の至るところ、人力の通するところ、殊庭絶域、未だ我邦のごときはあらざるなり。(正名論)

以上、幽谷の解釋は、若干の儒教的な色合が加はつてゐる。即ち「天を父とし、地を母とし」云々とあるのがそれで、支那における天地人三才の思想を借りて説いてゐる。元來、幽谷は、國學にも通じたが、彼れの最も深き造詣を有したのは、儒學の上にある。

儒學では、陰陽觀なるものがあつて、天地人三才は、すべて陰陽の結合から生じたものとしこの陰陽二元を統綜する根本力を太極といつてゐる。太極は、これを道ともいふ。道とは宇宙の根本生命であり、哲學的にいへば、世界の根本原理である。天地は、この意味におい

て、太極から派生し、太極そのもの、如く、公明・正大である。偏るなく、囚はるゝなく、中正であり、光明的である。故に幽谷は「天を父とし、地を母とし」云々と云つたのである。天の正しき如く、地も亦正しく、地の正しきが如く、人も亦正しい。それは、大極即ち宇宙の根本生命道に出づるからである。幽谷は、この事を後に補説して、かう云つた。それは『正名論』の考へ方よりも、遙かに一步進んでゐる。

天、象を垂れ、聖人之に則る。大にして人丈を修め、以て天下を治む。君臣上下の分、禮樂・制度の數、皆天の明に則る所以也。夫れ天象昭著、萬古一の如く、日月遞炤、列星隨つて旋り、秩然として紀あり、粲然として章を爲す。而して陰陽の運、至神測られず。聖人は庶物に首出し、群類を統理し、仰いで觀、俯して察し、法を取らざるなし。而して惟天を大となす。故に道は天に出づ。天は變せず。道も變せず。(天文志序)

幽谷の哲學的思惟と天人一如の意義

茲に至ると、幽谷の考へは、『正名論』のそれよりも圓熟して、宇宙の根本法則が天に出づる所以を明かにし、哲學的色彩を濃くしてゐる。唯茲にいふ天とは、支那における天と意味を異にするわけで、この事は、幽谷も天即ち太陽であることを明示した。太陽は天のシムボルであり、具象化である。更にこれを日本民族の特徴として、人格化して仰ぎ見る場合、それは、天照大御神であらせられると幽谷は考へた。茲に支那の所謂「天」と内在的意味を異にした點がある。

帝王(註、日本の皇室についていふ)相承け、天胤にあらざるなし。而して神明の統之を日嗣といふ。蓋しこれを太陽に象る也。昔は皇祖、明德光輝、以て天下に臨む。天下これを稱して天照大神と曰ふ。

茲において、日本が陽性の國であり、陽性の人に滿つる所以も亦おのづから判明する。その淵源は、天にあるが、天とは、太陽の象徴で、太陽の人格化は、畏くも、これを天照大御神の御姿の上に仰望しまるゝることが出来る。地も人もすべて、天照大御神の御垂訓を奉

じ、その御教に従ふことによつて、道の根元、天を一如することが出来るといふのが、幽谷の見解で、國體の本づくところを究めて、正鶴を得てゐるといふべきである。

かく見來ると、日本國體の淵源の上に深奥な意義があつて、その萬世一系の天皇を奉じて無窮・無限に忠孝一本の大道に終始することの偶然でないことが想はれる。

更に幽谷は、日本國の特長・美所を陰陽哲學的に、また人文學的に解釋して、左の如く、述べてゐる。

夫れ神州は天地の正氣也。陰陽の和するところ、寔に中國と爲す。中和は穀に見はる。而して甘美豊饒、文教の及ぶ所、其の養以て給し、精英は鐵に發す。而して堅剛銳利、武威加はるところ、其の功以て成る。限るに天地を以てし、外寇の患あるなし。

(蒲生君臧墓表)

この一節は、さながら、東湖の『正氣歌』に似てゐる。否、『正氣歌』は、幽谷の文章に淵源する。「神州は天地の正氣也」と云つたのは、正氣のあつまるところだといふ意味で、正氣と

は道の發現を促すところの根本力だともいへる。かうした道義に厚い國で、すべてが陰陽の和合から成り、中庸・調和の旨を得てゐると爲したところに、幽谷が日本國體の優越・超卓なる所以の由來・要素・成分を明かにした意味が分ると思ふ。

要するに、幽谷の日本國體觀は、素行・眞淵よりも、一層、内容を充實して、深い思索のあとを裏付けてゐるところに新意義がある。

第四章 幽谷の王道政治説

政治の第一義

水戸政教學の基礎工事を爲した幽谷の國體觀は、既に略説したが、左様した立場から、どういふ政治を施さうとしたのであるか、この事が一つの重要問題である。

惟ふに、日本國體から發現する政治は、當然、王道政治でなければならぬ。かう幽谷は思考したのである。王道政治とは、霸道政治と對照的にいつも見らるゝ稱呼である。即ち王道政治は、大公・至誠の政治で、今日流にいへば、哲人政治の意味である。ところが、霸道政治は、權略を主として、大義名分の意味に合致せぬ政治で、今日流にいへば、俗流政治にちかい。

故に幽谷は、國體尊嚴の旨を永久に把持する日本においては、當然、王道政治の行はるべ

きを至當の事と爲したのである。茲に水戸政教學の一特質がある。即ち唯國體の崇重な所以を説くに留まらず、これが崇重にふさはしい政治の行はるべきことを當然の原則とし、之が實現に向つて、邁進せねばならぬ所以を力説した。この意味からすると、水戸政教學は、王道政治の思想と之が實踐を豫想するところの重要意義を内包するものといつてよい。

かうした特色は、幽谷の『勸農或問』に及びその他の文章の上に現はれてゐる。彼れの王道政治の思想は、必ずしも深奥・高遠を旨としたものではない。支那では、この點について、哲學的思索の色合が深いが、幽谷は寧ろ易簡を旨としてゐる。

勿論、幽谷は、支那の王道思想を深く研究したのではあるが、これを日本化し、普及化するがために、易簡を主とした。即ち彼れは王道政治とは、つまり、仁政にほかならないといふことを明言し、且つその内容は、結局、庶・富・教若くは厚生・利用・正徳の三事にあることを主張した。

古今仁政の仕方、其説まち／＼に候へ共、つまる所は孔子衛に適く時に庶・富・教と宣ひ

また子貢が問に答へて、食を足し、兵を足し、民之を信すと宣ひ候事、これ堯舜已來天地の古道にて唐虞三代の書に厚生・利用・正徳これを三事と名づけ候。即ち此三箇條にて孟子、王道を論ずる、先づ恒産・恒心を説き、管仲が齊を以て覇たるも、倉廩盈ちて禮節を知り、衣食足つて榮辱を知ると云ひ、また禮義・廉恥を以て四維とし、四維張らずんば、國乃ち滅亡すと申候事、王霸純駁、其説各々淺深ありといへども、皆三事の古訓に符合せざるは、御座なく候。後世、儒者の道學を談ずる、多くは専ら教化を先として事業に疎なり、才子の經濟を論ずる、多くは、専ら功利を務めて徳教を略にす。皆一偏に御座候。然れば、今聖賢全體大用の政を遊ばされ候はゞ、第一、食を足して生を厚うして、人の庶ある様に、第二、用を利用して兵を足し、齊國の富み候様に、第三、正徳之を信じて、教の立ち候様に致し申さず候ては、眞の仁政とは申難く奉存候。(丁卯封事)

幽谷の説明は、簡潔で頗る要を得てゐる。管仲が齊に覇道政治を行つたときも、權略を旨としたが、尙ほ且つ、「衣食足つて禮節を知る」といひ、禮義廉恥の四維を必要とした。殊に

王道政治に至つては、當然、それ以上に出て、庶——人口を増加し、富——國を十分に富まし、教——孔子教によつて、思想統制を計り、教化につくさねばならぬといふのが、幽谷の主張で、厚生・利用・正徳の三事も亦これと同一趣旨に歸する。即ち王道政治と稱するものも、その極意とするところは茲にあるといふのである。

利用・厚生・正徳の三事

が、當時、往々この意味を理解しないで、或は正徳のみを重んじ、或は厚生・利用のみを偏重しようとするの風が少くなかつた。幽谷は、右において之を指摘し、前者の傾向は、儒者と稱する人々の間に多く、後者の傾向は、才子を以て自任する人々に多いとした。が、いづれも一方に偏つて、王道政治の極意を知らないものだとしてゐる。

茲に至つて考へられることは、水戸政教學本來の旨が、日本國體の尊嚴を力説し、大義名分を高調することを主眼とすると同時に、之が内容にふさはしい王道政治を實生活の上に實

現しようとなつたことが分る。これを日本流にいへば、皇道政治にほかならない。

それから幽谷は、王道政治の實現といふことについて、當時の實際に照らして、特に力説するところがあつた。事實、當時の社會問題として、重要視せられてゐたのは、いかにして富農の重壓下に喘ぐ貧農を救ひ出し、農業を振興するかといふ上にあつた。

蓋し封建治下にあつては、社會階級上、士の次に農を置いた位で、工商階級よりも、農民階級を重要視する思想を示してゐた。

が、武力中心時代が、久しい平和と共にいつの間にか影を没して、經濟中心の時代がくると、農民階級よりも下位に置かれた工商階級、殊に商人らが、ぐんぐ伸びて、頭角を現はすやうになつた。これは一つの勢である。既に經濟中心の時代が來て、それが益々傾向的に助長されるとすれば、當然、商人階級が勢力を加へ來るのが一つの實勢である。

かうした實勢のもとにあつては、農民階級の苦痛を加重し來らざるを得ない。彼等の中にあつては、大部分が經濟的に不利の地位に置かるゝのみならず、比較的に重税を課せられて

悲惨な境地に置かれたものが多い。そのため、或る部分は遊民化し、或る部分は自暴自棄してその所有の田畠を借金のために、富農の手に併合されたものも少なくない。かの百姓一揆が江戸中期から末期にかけて、頻發したのも、要するに左様した實情にもとづくところが多い。

故に當時の儒者は、概ね重農主義を高調して、農民の生活を豊かならしめるやう、力説したが、概して抽象的であるか、或は幽谷が『丁印封事』で指摘してゐたやうな弊に囚はれて、適切な貧農救濟策を具體的に提示し得たものは存外に少い。

幽谷は、かうした點に深憂を抱いて、先づ王道政治の精神を水戸藩内の貧農救濟の上に、また農業振興の上に發揮しようとして鋭意した。かういふ精神のもとに書いたのが、彼れの『勸農或問』である。

幽谷の農本主義的改革思想

そこで、幽谷は仔細に水戸の農政を考察し、或は百姓の生活を調査して、どんなところに、

いろいろの弊害を生じてゐるかを究め、かくして五つの弊害を列挙したのである。

その(第一)は侈惰の弊あること、(第二)は兼併の弊あること、(第三)は力役の弊あること、(第四)は、横斂の弊あること、(第五)は煩擾の弊あること、を列挙した。

以上、五つの弊害を説くに當り、幽谷は、農政上の見地から、「昔は人餘りありて地足らず、今は地餘りありて人足らず」といふ有様を叙し、未開墾の土地が少からずあつて、閑却された遺利が多いといふことを述べてゐる。この點、今日の日本と異るところで、今日は人口増加率の猛烈なるために、いろいろの社會問題を發生してゐるのだが、幽谷の時代は、人口減少を憂ひ、未耕地の少からぬのを遺憾として、そこから問題を生じたのである。

かくして幽谷は、左様した不利の情況を矯正して、勸農の精神を發揚するために、五つの弊害を先づ擧げてかかつた。その中、(第一)侈惰の弊といふのは、幽谷の述べてゐる如く、「民の奢りて且つ横着する」といふことである。かうした傾向は、商人階級の擡頭にもとづくところが多く、奢侈・遊惰の風俗が次第に農民の間にも、のび出して來たことを指摘したのである。

である。

(第二)兼併の弊とは、富農が貧農に金を貸した抵當として、結局、貧農の田畠を自己の分に併合し、そこから、農業の不振を生じ來り、或は貧農が四散するに至るやうな現象をも生ずるのを指したのである。それには種々の事情があつたが、當時、久しきに亘る未納税について、藩廳からきびしく督促されると、苦しまぎれに田畑・家屋などを抵當に富農から借金するものが少くなかつた。

それと共に、貧農は、やはり、その日、その日の生活に追ひ廻されて、次第に窮迫してゆく上に、幽谷の云ふ如く、「貧民の田は纔かに十畝を餘して常に百畝の税を出し、富民は纔かに十畝の税を出して、百畝の饒を收む」といふやうな不公平極まる現象を生じた。かくして貧農は、富農のためにその所有の田畑を取りあげられて、併合されるのを免れないのが常である。幽谷が兼併の弊といつたのは、それであつた。

それから(第三)力役の弊といふのは、幽谷の言葉によると、「百姓の田畠相應に、年貢上

納する上に、持ち方に應じて、又諸役かかり、傳馬・歩人・配符などに逐ひ使はれ」云々とある。即ち農民は、徴税に苦しめられた上に、度々、過度の勞役をも課せられて、前後はさみ討ちに逢ふやうな苦境に陥つたのである。(第四)横斂の弊といふのは、正當の税金以外にいろいろ名目を作つて、農民を搾取することである。(第五)煩擾の弊とは、法令を過度に綿密にして、農民を苦しめ、わづらはしさに堪えぬやうにすることである。

幽谷の云ふところは、恐らく、これを各藩共通の弊と爲すことが出来ようと思ふ。かかる苛重下に呻吟する無産的農民を經濟上から救ひ出し、彼等をして衣食住に事足らしめ、然るのちこれを教化するのが王道政治の一發現であらねばならない。

いかに農政上の弊害を除くべきか

遂に幽谷は、如上の弊害を除くことに先づ思ひを致した。彼等は、順序をかへて、終りの方にあげた弊害除去の方法から説き起して、(第一)煩擾の弊を除くために、虚文を捨て、

實效を收むるの方針を確立すべきを云ひ、(第二)横斂の弊を除くには、理財の正道を守つて不合理的徴税を一掃すべき旨を主張した。更に(第三)力役の弊を除くためには、公平な態度のもとに毎年、勞役を課すべき日數を一定し、農民が迷惑せぬよう、配慮すべきを以てしてゐる。

次に(第四)兼併の弊を除くには、均田及び限田の二方法を以てすべきことを主張した。均田とは、持ち分多少は、その儘差し置き、有り高の上にて帳面と畝歩と引き合せて、收穫と取付とを考へ合せて、高と免(税率)を均しく、貧富共に損得なからしむることなり」と述べた。即ち支那の均田説とは異り、富農に少く課税して、貧民に多く課税するやうな矛盾錯誤なからしめるよう、實地調査の正確ならんことを力説したのである。

限田とは、「豪民の勢に乗じて際限なしに田地を買取ること、小民産業に困む基なれば、古人も限田・名田の議あり。(中略)是迄の分は姑く差し置き、已後、限制の高の外、買ふこと能はざるやうにすれば、此の後、富者出来ても、大分田を専らにすることならず」と述べ

てゐる。要するに、均田によつて税金の公平を計り、限田によつて、富者の跋扈を抑へ付けようとしたのである。

最後に(第五)侈惰の弊を除くについては、第一に農民の利益を計つて、質實剛健の風を鼓吹し、勸儉の心を奮ひ起さしめねばならぬことを力説した。そこに幽谷の重農主義をいかに正しく、いかに有効に生かさうとしたかが明白である。

要するに、幽谷の勸農説は、彼れが平生、尊重してやまなかつた王道政治の一發現で、彼れは、どの方面に於ても、實際的にこの精神を發揚しようとなつたのである。既に彼れが十七歳の時に書いたといはれる『安民論』には、早くも王道政治思想の閃影を示してゐたのを見ると、彼れが夙に政治の大道を會得してゐるのを推想さるゝのである。

第五章 幽谷の教育説と倫理道德説

幽谷の孔子教崇敬

幽谷の教育方針は、彼れの傳記のうちで概ね略述した。が、その教育説については、尙ほ若干の説述を爲すべき必要を感じる。

彼れは、確かに教育説において、彼れ自身の創意・獨創を發揮した先覺者の一人だつた。惟ふに、既述した如く、當時の教育家は、大體において、江戸初期以來の慣習に従つて、儒教における教育説をその儘、鵜呑みにしてゐたものが多い。その大半は、幕府が官學視した程朱學の精神によつて、教育の内容を規定し、そこに一つの方針を定めた趣がある。

その他、陽明學によるもの、古學によるもの、或は獨立學派、自由學派のカテゴリイに入るべきもの、或は時として、老莊學派に屬するものなどもあつた。が、いづれにもせよ、

その大部分は、支那の教學によるところが多かつたことは否めない。

幽谷の儒學傾向は、在來、水戸學派が程朱にちかといふので、程朱學に近よつてゐるかの如く傳へられて來た傾きがあるけれども、決して左様ではない。寧ろ古學派に近い。

勿論、幽谷は、別段、儒學上、どの派に屬するとも云はなかつた上に、程朱學についても理解し、同情した。が、その佛教の内容を借り來つて、理論を助けたことには慊らず、程朱を尊敬したが、これを崇奉しなかつた。この事は、正志の『及門遺範』『下學邇言』などの中に傳へられてゐる。

藤先生曰く、宋儒初め道家及び浮屠の書を読み、高妙の言、先づ入つて主となる。故に其の老佛を排せんと欲して、亦自ら高妙の説を爲し、以て之に勝らんことを求む。高妙は本老佛の意に出づるなり。(下學邇言)

また幽谷は、朱子學を「學の一端に偏つて、この全旨を失ふ」(『及門遺範』)とも云つた。これによつて、彼れが程朱學に不満を抱いたことが分る。また彼れは、老莊にも慊らないで

「老子陽に恬澹・無爲を唱へ、陰に自ら聰明を恃み、智術を貴ぶ。古人の轍迹を踏むを欲せずして、聖人を非議す」(『及門遺範』)と云つて固く反對したのである。

左様した結果、彼れは、孔子教に直面して孔子の言行から益を得ようとすることを以て正しい道だと信じた。この事は、彼れが十五歳の時に書いた『志學論』の上に、もう、はつきりと出てゐる。即ち幽谷は、それにおいて、「聖人の道は孔子集めて大成す」といひ、「夫れ學は、聖人の道を學ぶ也。聖人の道は孔子に傳はる」ともいつた。左様した精神が教學上彼れの一生を貫いたのである。

聖人の道と國體教育

聖人とは、今日流にいふと、哲人政治家である。支那では孔子以前において、堯・舜・禹・湯・文・武・諸王及び周公らを以て、聖人の代表者とした。即ち聖人の道とは、堯・舜・禹・湯・文・武・周公らの示した言行そのものである。そして孔子は、左様いふ哲人政治家が歩いた道を

究めて、『論語』や六經をとほして集大成したのだ。幽谷が『志學論』において述べた上記の意味は概ねかくの如くである。

蓋し聖人の道は、道德の實踐を主として知識を従とし、人倫・常道を説いて、必ずしも高妙・幽奥を旨としない。至易・至簡で、而も千古不滅の眞理を藏する。それは大故大新である。故に幽谷は、聖人の道を純粹に説いた孔子の教に歸服したのである。この意味から、彼れは、孔子を尊崇して、學風の上に古學派的色彩を鮮明に現はした。

従つて、幽谷の學塾における教科目の主要分を形造るのは、孔子教に關するものである。それは既記したから、茲には觸れない。唯特に一言すべきことは、孔子教の祖述以上に、日本國體を重んじて、彼れ独自の國體教育を子弟に授けたことである。

國體教育！

それは、在來の學者が多くは、氣付かぬところだった。幽谷に至つては、この點に重要意義を認めて、彼れの精究した日本神典の知識を土臺として、國體の本義を門下の人々のため

に講述したのである。彼れの見解によれば、孔子教にしても諸子百家の説にしても、要するに日本國體の精華を發揮するための助成的要素にはかならない。即ち日本が主で、支那は客であり、皇道が根本で儒道は枝葉である。彼れが華夷・内外の辨を嚴に説いたのも亦そのためであつた。

そこに、幽谷が時流を抜いた教育觀を有したことを考へざるを得ない。それから幽谷は門下を率ゐてゆくについて、學問・事業の一致を高唱し、孔門の所謂「成徳・達材」の旨に従つて、人物を陶冶し、晩成を重んじて、早熟・速達を嫌つた。

生きた教育の意義

惟ふに、當時の武士教育における一主點は、修身齊家及び治國平天下の旨をすべての青年に注入するにあつた。之を短くいへば、「修己治人」である。先づ人間としての自己を作りあげてそれから之を人に及ぼすといふわけで、政治家としての資格を具するのを必要とした。



従つて、その學問も經世實用を旨とした關係上、學問と事業との一致を當然とした。

が、中には、餘りに學問に凝つて、これを事業の上に施すことを忘れ、學問と事業とが別々になる弊に陥つた場合が少くない。幽谷は、之を非として、學問・事業の一致を主張したのである。

且つ彼れは、孔門の教授法を重んじて、その門下の長ずるところを察し、その傾向を看取して、それぞれ長所に應じた發達を爲さしめようと思がけた。

先師又曰く、聖人の人を教ふる、其の才の長ずるところに従つて、以て其の器を成す。

全きを人に責めず。(下學適言)

幽谷は、かういふ方針で、個々の人を所長によつて、巧みに活かしてゆくことが教育法の第一義だとしたのである。即ち文章に長ずるものは、この方面に伸展せしめ、政事に長ずるものは、政事に才能を發揮せしめるといふ風に、決して一個のカテゴリイのうちに束縛することをしない。そこに幽谷の見識が光つてゐた。

若しそれ幽谷の倫理・道德に関する考へは五倫・五常を重んじて、その第一位にある忠孝一本の旨さへ、各人に徹底すれば、他の諸徳は自然にこれに附隨する。一々、説かずとも、必然、行はれる。幽谷はかく信じたが、これについては、恭謙の心を以て、自分を制し、始終、徳行に進むの用意を怠つてはならぬとした。即ち自彊やますして、日に道に合し、道を體すべきことを肝要とした。かうした意味から、彼れは、佛教の所説を喜ばないで、之に反對し、その考への空寂に失する點を排撃したのである。

要するに、この點について、幽谷は、必ずしも、發明したところはない。が、彼れの倫理道德に於ける考へが、新異を求めないで穩健・中正であつたことにおいて、一個の所長を示してゐる。

會澤正志齋

第一章 會澤正志の前半生

天才的な學問好きの少年

幽谷によつて、基礎工事をされた水戸政教學が大成したについては、會澤正志齋の力に俟つところが多かつた。彼れの生涯は、東湖の如く、花やかでなく、複雑でもない。何れといへば、單調・質實で、ばつとしたところが見られない。けれども水戸政教學の原理を組織して、廣く天下にその意義を闡明し、皇政復古を招來する動力を作つた功勞に至つては、深く敬重すべきものがある。即ち思想家として、學者として、爲した彼れの仕事は、他に比して、最も花々しく、輝かしいところがあつたといつてよい。

正志齋（伯民）は、藤田幽谷の高弟を代表する第一人者で、諱は安、字は伯民、通稱を恒藏といひ、愨齋の別號があつた。その祖先は駿河の人で、後、常陸に移り、代々、久慈郡諸

澤村にゐた。

彼れの先祖のうちには、仕官したのもあつたが、特に著名な人物はゐない。正志齋の父は、諱を恭敬（後に與平）といひ、廉潔で勤勉で正直な能吏だつた。平生、名を求めず、利を追はず、頗る恬淡で、人々から信頼された。藤田東湖の記すところによると、「沈毅・寡言の人」で、民政に心をつくし、プロレタリアに深い同情を持つた。かうした父から、正志は、相當の感化を受けたといはれる。

正志は、少年時代から聰明で沈着で、氣概があつた。幼時、近所の小供たちと嬉戯するに當り、いつも餓鬼大將の役をして、元氣よく、跳ね廻つた。彼れは、早く藤田幽谷の門に入り、頗る勉強して、十歳の時には、『孝經』を幽谷から教へられて感動し、「この道を實行し得ないものは人でない」と思つたと傳へられる。

當時、青藍舎（幽谷の私塾）は、正志の家から一里ばかり離れた場所にあつたが、正志は、少しもそれを苦にせず、早朝、學舎に出かけ、深更、家に歸つた。そして風雨の烈しい

日も、雷雨などがあるときも、一度だつて休んだことがない。それ故、天性聰敏な彼れは、數年の間に、ぐんぐん進歩し、幽谷門下の秀才として、將來に望を囑せられた。

彼れの師、幽谷の講義は、尋常の迂儒と異り、識見卓拔で、而も言葉の調子に力強いところがあつたので、正志は、いつも幽谷の講義を聞くのを楽しんだ。

ある日、正志が青藍舎からの歸途柳堤―水戸上市・下市の間にある堤―を歩いてゐると、親戚のもの逢ひ、聲をかけられたが、一向氣付かぬ様子だつた。それで再び呼ぶと、正志は、びつくりして、失禮を謝し、「今日は幽谷先生が節義のことについて話されたので、すつかり、感激して、その事ばかり考へ、つい何事も氣付かぬのでした」とわびた。それによつても正志が、いかに熱心に幽谷の説に聞き入つたか推想される。

貧苦のうちに兩親を喪ふ

正志が十一歳の時である。一日、幽谷は、塾生らに向ひ、ロシア人が次第に南下して、北

海道方面を荒らすことを話し、「これをいつ迄も打捨て、置くのは、日本の國辱である」と慷慨しつゝ、話した。正志は、この話に深く感動して、ロシア人を憎み、家に歸ると、泥土を固めてロシア人の形を造り、これを頻りに鞭ち罵つた。

以上の事を考へると、正志が幽谷の死後、恩師を慕つて、『及門遺範』を書き、また『新論』のうちで、率先、攘夷と國防のことを精説したことの偶然でない所以が分る。

それらの日幽谷と親しく、意氣投合した蒲生君平(二四二八—二四七三)が、青藍塾における正志の様子を見て、深く感服し、「會澤君は、沈着で、しつかりしてゐて、識見がすぐれてゐる。將來、幽谷君の學統を正しく傳へるのは會澤君だらう」と云つたさうである。流石に君平の見るところは正しかった。

かうして正志は、學業著しく進んだので幽谷の推薦により、寛政中、彰考館の寫字生となり、享和三年、江戸勤務に轉じた。折柄、文化元年四月、公用で大阪へ赴いてゐた父與平が同地の官舎で病んだといふ飛報が來た。孝心深い正志は驚いて大阪へ急行し、手厚く介抱し

た。が、力及ばず、五十八歳で旅中に卒去したのである。

依て正志は涙の中に、亡父の遺骸を會根崎の藤井寺に假葬して、江戸に歸つた。ところが、その一箇月後に母が又病んで、間もなく、歿して了つた。この重ね重ねの不幸に、正志は、深い悲痛の感に沈みつゝ、心喪三年に及んだ。

その後、正志は亡き父の遺骨を他郷に置いてあるのを氣にかけ、故郷水戸に持ち歸つて改葬したいと思つたが、極貧のために、どうすることも出来ぬ。それで彼れは、極端に衣食の費用を節約して、旅費その他を辛くも調達し急いで大阪に赴いた。かうして亡父の遺骨を水戸に持ち歸り、文政二年四月、水戸の西方、千波村の本法寺に亡母と墓域を同じうして葬つた。茲に至つて、正志は、やつと心を安んじたのである。

これより先、正志の母が世を去つたのは、四十八歳の時だった。かの女は温和で慈悲深く、家事については、その良人をして後顧の憂ひなからしめた。平生、正志に向つて、他と争はぬやう訓戒し、讀書につとめて、深く修養すべきことを勧めた、従つて正志の成功は、

一面、この賢明な母の感化に負ふところがあると思はれる。

前途に囑望せらる

元來、正志は、最初から學者型の人であつたが、文事に偏ることなく、武事についても相當、力を入れた。平生、劔術・槍術を好み兵書を愛讀して、有事の日に備へることを忘れないう。ある時、正志は身體を鍛へるため、一夜、甲を懷ろにして、峻坂を上下したことがある。その様子を見たものは、「丸で狂人の沙汰ぢやないか」といつて笑つた。けれども正志は、それらの評を一向、氣にせず、始終、左様した鍛錬を繰返して、身體を丈夫にすることにつとめた。

かく正志が武道に熱心であることが、藩主武公の耳に入ると、「それは感心ぢや。由來文學の士は武事を好まぬ。それは古今の通例である。が、ひとり、正志齋のみは、この例を破り、深く武術を好むことは、一つの美談としてよい」と賞揚した。

更に幽谷の如きも、正志の人物を推重し、「彼れは、まだ若くて、世間並にいへば、左様全きを望むことが出来ぬけれども、ひとり、彼れのみは例外に置いてよい。彼れは、慷慨家で、愛國心に富み、極めて節義を重んじて、平生、讀書・擊劍に熱中し、少しも、他に氣をちらさない。且つ物質慾などに囚はれないで、ゆつたりとしてゐる點なども、今の若い者の中には、見られない所だ」と嘉賞した。

かうして正志の評判が宜いので、文化元年、武士の列に入り、諸公子の侍讀として、その輔導に當つた。その時分、烈公は、まだ僅かに五歳であつたが、平生、正志を尊信し、正志も亦烈公に心を傾けて、智徳の開發に資した。爾來、左様した關係が十七年間に亘つて續いたのである。従つて、烈公の精神修養については、正志の及ぼした感化が少くないと思はれる。

その後、文政七年に至り、アメリカの船が上陸大津の濱に來たとき、アメリカ人は、何の許可も得ないで上陸した。漁民が彼等二人を捕へて、官に訴へたとき、折柄、水戸にゐた正

志は、藩命により、彼等を應接した。ところが、アメリカ人は、言を左右に托して、中々、實情を明かさない。

それで正志は、激怒して、手きびしい詰問を加へ、到頭彼等を屈伏させたのである。蓋しアメリカ人は、侵略の野心を抱きつゝ、大津の濱あたりを偵察したものだと思はれる。この時の始末は、正志の『諧夷問答』中に書かれてゐる。

明治維新の經典『新論』を書く

かうした有様に接して、深く歐米人の侵略主義を知つた正志は、日本の國防が餘りに貧弱なことに想ひ到り、切に憂慮してやまない。のみならず、當時、大名、武士の一半以上が軟化して無氣力となり、有事の日に役に立たぬことを考へると、正志は、ちつと傍觀してゐることが出来なかつた。

それらのことが有力な動機となつて、彼れの代表的名著『新論』の執筆、起稿となり、文

政八年、これを完成した。そしてその翌年、彼れの恩師、幽谷の手を経て、時の藩主哀公に上つたのである。

哀公は、正志の憂國の至情を諒としたが、當時にあつては、その云ふところが、皇室中心主義に立脚して、幕府當局の忌諱に觸れるやうな、硬直の論を含んでゐたので、公刊を許さなかつた。

従つて、彼れの苦心に成るところの『新論』が世に出たのは弘化元年のことである。當時正志は、烈公の奇禍に座して、幽囚生活を送るうちに、門下の人々が正志の卓見に共鳴して、そつと出版したのである。これを讀んだ鴻儒の一人、尾藤二洲(二四〇七—二四七三)は「稀世の名著だ」といつて、再三、感歎した、それと共に、『新論』は、羽なくして天下に飛び、九州、中國方面に廣く讀まれ、士人の家で、一本を藏しないところは、殆どなかつたといはれる。

折柄、文化九年の末、正志の恩師、幽谷が歿したので、正志は、幽谷に代つて、彰考館總裁の地位に就いた。次いで文政十一年『豈好辯』を著はして、『新論』に説いた排耶蘇の立

場を理論の上から明かにし、合せて、佛教を非國家的思想を含むものとして排撃した。それは、四十八歳の時である。

文政十二年、正志は、その同僚で、品行の上に評判がよくなかった川口緑野（二四四三—二四九五）と修史上について意見が合はず、之と交りを絶つて辭職し、改めて教授の椅子に就いた。蓋し正志は、品行正しく、嚴正・沈毅であつたが、緑野は才人的で、文章をよくしたが、平生、言行の上に檢束を加へないところから、どうも、正志と相容れ難かつたのである。

政教刷新について貢献

この年（文政十二年）哀公の病が篤く、繼嗣がまだ定まらぬところから、一番動搖した。この際、正志は東湖と志を同じうして、烈公擁立に全力を注いだ。當時、正志らは、決死の覺悟で、無斷、江戸に出で、東奔、西走したのである。幸ひ正志らの望んだ通り、哀公の遺

命によつて、烈公が後嗣となり、事は圓滿に解決した。唯正志は、無斷で江戸に出たことについて形式上處罰せられ、天保元年四月、三旬の逼塞を命ぜられたことがある。

同年（天保元年）新藩主、烈公が藩政革新を意圖した時に當り、正志は、郡奉行に任せられた。それは、短期間の在任にすぎなかつたが、東湖らと共に、度々、上書して、政弊刷新のため獻策することを怠らなかつた。この年、烈公が始めて藩に就いたとき、親しく正志の家を臨み、政教上のことについて、意見を徴した。正志は優渥な君恩に感激して、思ふところを正直に上言したのである。當時、正志は、『迪彝篇』を書き、日本道德の大要を通俗的に述べた。

次いで天保五年、五十二歳の時、日本の祭祀について述べた、『草偃和言』を著し、同八年、攘夷精神を説いた『兩眼考』を纏めたのである。それから天保十年、正志五十七歳の時、烈公が藩校、弘道館を設立するについて、古今における學制の變遷を取調べるやう、正志に命じた。依て彼は、『學制略説』を書いて、烈公に上つた。當時、烈公は、弘道館に

祭るべき神について、正志の考へを下問したので、正志は思ふところを述べ、「神國日本は、祖國本位に神を祭ることが、やがて、堯舜・孔子らの教へた旨にも協ひます。故に、神として、天照大御神を祭りまらせるのが至當と存じます。大御神のお垂訓は、三種の神器で明白で、實に日本道德の淵源をなしてをります。が、唯臣下として、天祖を祭る場合、或は非禮に陥るなきを保し難いと存じますから、天祖を補佐し奉つた神々の中から、特にすぐれた神を撰ばれるのが穩當かと信じます。それについて、文武一致の旨によつて、武神に武御雷神、文神に天兒屋根命を祭られては如何でございませう」と答へた。それに關し、烈公は、東湖らの考へをも徴して、結局武神として、武御雷神を祭ることに決したのである。

學塾を開いて人材養成

これより先、正志は、文政三年、三十九歳の時に、學塾を開いて、人材を養成したが、この方面の仕事は、漸次、旺んになった。蓋し、それは、正志の『新論』が出来て以來、之を

傳寫して、讀んだり、或はその内容を聞知したりして、正志の人物、思想を敬慕したものが次第に彼れの塾へくるやうになつた結果と思はれる。今、正志のもとに入門した人々のうちで、比較的知名の人々を挙げると、左の如くである。

○佐賀 増田忠八郎、永山二水、佐々木永弼、古賀丈一郎、細田某○久留米 眞木和泉守
村上量弘、木村子遠、姉川行道、松浦八郎、宮田半四郎○薩摩 肝付毅卿○長門 赤川淡水
中村雪樹○日向 阿萬篤夫、平部溫卿○常陸 加藤櫻老、藤森敏脩、宮古悌○土佐 奥宮猪
惣次、○鳥取 安達清風その他。

以上のうちに、眞木和泉(二四七三—二五二四)・赤川淡水・安達清風・加藤櫻老などは、天下の名士である。それら入門の士に對して、正志が、どんな態度で接し、どういふ科目を講述したか、現在明確でない。が、懇到・親切で、溫乎たるうちに、嚴正な趣があつたことは、正志の平生に徴して、おのづから明かである。

例へば安達清風の日記を見ると、醉中、無届で外泊したことがあつたが、それに對して清

風は必ず訓戒を受けると思つてゐたところ、「先生唯笑を含む耳」とあつて寛容だつた。それで清風も安堵したことが記されてゐる。

それから肥後出身の門下、國友重昌（重章？）が『遊東記』の中で、その師たる正志に、水戸藩士の土着といふことについて質問したとき、丁寧にな得する迄、説明したことを記してゐる。また國友がその後、晩年の正志を訪ふと、八十近い正志は、病中、困臥してゐたに關らず、遠來の門人を歡待して、懇ろに語つた旨が國友の日記にある。

以上により、正志が、いかに門下を愛し、その指導に眞心を打込んだかが判明する。それに、正志齋塾が地方において、重んぜられてゐたことは、かの有名な勤皇僧、月照（二四七三—二五一八）が赤川淡水の水戸に遊學するとき、送別の宴において、左の如く詠んだことによつても、想見せられる。

天朝を尊奉して外夷を斥く、

一論の新論餘師あり、

丈夫親しく其人について學ぶ

神州萬世の基を定むるに足る。

かうして正志は育英事業の上に成功し、その聲名は、漸く全日本の到るところに知らるゝやうになつた。それらの日、正志は、曩きに書いた『迪彝篇』を鷹司關白に献上したのである。關白はこれを宮中に捧呈したので、仁孝天皇の勅覽に入り、御嘉賞を賜はるの光榮に浴した。之と前後して、正志の『新論』は、三條實萬（二四六二—二五一九）がこれを孝明天皇に獻じて、天覽の榮を賜つたのである。その事は、入江子遠の『傳信錄』に記されてゐる。

第二章 會澤正志の後半生

生活上における一浮一沈

これ迄の正志は、大體、順調に進んで來た。ところが、茲に彼れの生活の上に一打撃を與へる事件が起つた。

それは弘化元年のことである。

烈公が幕府の嫌疑を受けて、致仕、謹慎するの止むなきに至つたとき、豫ねてから、東湖らと同じく、進歩派に屬してゐた正志は、可なり不遇の境地に起たねばならなかつた。彼れは、動搖する人々に諭し、また藩の支族、松平大學頭を動かして、紀伊藩主に説き、烈公の冤罪を晴らさんことに努めた。

が、保守派は、事毎に正志の云爲を非難して、到頭、彼れを水戸仲町の廢宅に禁錮した。

この幽囚生活は、烈公が幕府から赦される迄續いたのである。

この幽囚中、正志はよく困苦を忍び、偶々囊中にあつた朱、藍二碗を以て、これを磁器に磨し、箸を嚙んで筆とし、『孝經考』『泰否炳鑑』『江湖負喧』などを書き、更に『下學邇言』を著はした。『江湖負喧』は、會て『新論』中に言及し得なかつたところを補ひ、一篇の時務策として書いたのである。また『下學邇言』は、『新論』で述べた日本精神方面のことを學的に述べ、教學・政治を一新すべき理論を書いたものである。

その中、嘉永三年となつた。

その年、烈公は幕府から赦されて、再び幕政に參與するに至り、正志も亦謹しみを解かれて、烈公のために忠勤をはげんだ。爾來、彼れは主力を尊皇攘夷の問題に注ぎ、烈公が時局の切迫により、幕府の外交策に就ても與るやうになると、正志は、その所見を烈公に上申して、参考に資し、或は、羽倉簡堂（二四五〇—二五二二）川路聖謨（二四六一—二五二八）などの幕府における有力家に書を與へて、對外硬や主戰説を高調した。この點で、正志は東湖と

主義・方針を同じうしたのである。

かく正志が、飽迄、憂國の至情を發露し、忠誠を勵むのを見て、藩主順公（二四九二—二五二八）は、心から正志を重んじ、安政元年彼れを新番頭に進めて、名刀を賜り、安政二年には彼れを小姓頭兼督學に任じた。當時、正志は、城代家老に次ぐ待遇を受けたのである。

この年（安政二年）正志は、多年、學者としての功勞により、他藩の大儒と共に、將軍家茂に謁するの光榮に浴し、家茂から親しく、賞詞を受けた。この事について、烈公は深く正志のために喜び、手書を彼れに與へて、「今後、益々實學を唱導して、今日の厚恩に酬いねばならぬ」と傳へた。その際、順公からは佩刀を賜り、烈公からは、盆松、手爐などを賜つた。それは、正志が七十四歳の時である。惟ふに、藩臣として、學者として、それが當時における最高の名譽であつたらう。

急轉直下の時勢と正志の死

ところが、茲に再び正志を驚かせ、悲しませた事件が突如、起つた。それは、安政五年、烈公の急進的態度のために、また幕府の怒りを招き、謹慎を命ぜられたことである。そのため、水戸藩士は何れも憂憤し、不穩の空氣が到るところに漲つてゐた。この際、正志は、一面において藩士を諭し、一面において烈公のために辯じ、殆ど寢食を忘れるほどだつた。

かうして時代は、急轉直下の勢で、大動搖のうちにあつた安政の大獄を序幕に、櫻田の大事變が起り、浪士の一團が高輪に住むイギリス人を襲撃するといふ風で、次ぎから次ぎへ、異變が續出した。左様した急迫せる時局に直面して、正志は成るべく、穩健の態度を以て善處しやうとした。が、藩内には、急進、漸進、保守など、いろ／＼の派があつて、正志の考へを實現することがむづかしかつたのである。それ故、正志は職を退く決心をして、之を藩主に上申するに及び、慰諭せられて、隨意勤務といふ事になつた。

その後、文久元年に至り烈公が薨じたので、正志は、非常に失望し、落膽した。が、彼れ

は、順公の知遇の恩に感じて、尙ほ最上の努力を藩のために爲すことを惜まず、更に文久二年烈公の息、徳川慶喜が將軍家茂の後見となつた際、正志は憂國の至情を披瀝した『時務策』一篇を慶喜に上つたのである。それは、恐らく、正志の最後の筆で、時務の推移するところを察して、時宜により、開國の方針を執るべき旨を、上申したのである。間もなく、その翌年（文久三年）正志は、病のために最後の呼吸を引取つた。時に年八十二。

教育家としての正志

以上、正志の一生を略述した。尙ほ茲に教育家としての彼れを少しばかり素描する。彼れの人柄は、教育家として最もふさはしいところがあつた。彼れの風采は、端正であり、寛裕であつて無暗に喋らず、謙遜のうちに温情を湛へ、禮儀正しく、人々と交つた。

また彼れは、故舊に厚く、長老を尙び、何人に對しても、眞心を以て接したのである。それ故、どんな亂暴なものでも、正志に逢ふと、すつかり、態度を改め、彼れを尊敬した。

それに正志は、幽谷の衣鉢を繼いで、學術を講説することにも長じてゐた。彼れは、大言壯語するのを避け、從容として、靜かに道を説いたので、聴くものは、おのづから、身に泌みて、これに耳を傾けた。また彼れが子弟に對するときは、悌順を説き、客氣に逸ることを戒め、士氣を振ひ、名節を磨くべき旨を勧めたが、漫に塾生を壓迫せず。各自の個性に應じて、これを懇ろに導き、その長所を生かすことに力を入れたのである。

右によつても、正志が教育家として、最もふさはしい長所を持つてゐたことが分る。彼れの詩文集を見ると、その門下の學成つて郷里へ歸りゆくのを送る序や、門生と一緒に唱和した詩などが多い。そこに師としての彼れの温情が淀みなく、流れ出てゐて、靄然、春風のやうな感じを與へる。従つて四方から正志の高風を欽慕して集つた塾生が多かつたのは當然で、その塾内における讀書の聲は、朝晩、街上においてよく聞くことが出來たといはれる。

既述した如く、彼れの門に入るものは、『新論』に感激したといふことなどが與つて力がある。久留米の眞木和泉の如きは、友人、木村子遠が國へ携へて歸へつた『新論』を読み、

案を叩いて、思はず、快哉を叫び、正志の人物を敬慕した。それが彼れの入門の動機である。吉田松陰（二四九〇—二五一九）は、正志と師弟の約はしなかつたが、準門下にちかく、水戸滞在中、前後六回、正志を訪ひ、一度酒中、懇談したことがある。その際、深く正志に敬服し、「正志先生は人中の虎だ」といつたさうである。

健康に注意して清貧な學究生活

最後に正志についての挿話二三を記して、この篇を結ばう。元來、正志は少年の時、病弱で青い顔をしてゐた。それ故醫師は、彼れに勧告し、「君はすつかり讀書生活をやめねばいけない。餘り勉強すると、三十歳にならぬ中に、この世を去らねばならない」と云つた。が、勉強好きの正志に向つて、讀書を禁ずるのは、魚を水から離すにひとしい。

正志は、この勧告を聞いて、心中深く決心し、「自分は無爲に惰眠を貪りたくない。自分の好きな讀書をやめることは、生きながら葬られるのと同様だ。それよりも、うんと攝生に

注意して、思ふ儘に勉強し、それで倒れた方がよい」と考へた。かうして彼れは醫師の留めるのを聞かないで、讀書に熱中したが、一方において、武術によつて身を鍛へ、起居・飲食を規則的に正しくして、苟くも、健康を害ねるやうなことは一切避けた。そのため彼れは頑健な人となつたのである。

それから、正志は、清貧に甘んじて、極めて質素な生活を續け、何ら物質的に求めようとしなかつた。晩年、彼れが將軍家茂に調するときも、その仕度にいろいろ費用を要したが、手もと不如意のため、藩から公金二十五兩を賜つた上に、別に十五兩を借りたといはれる。彼れほどの大儒で、かうした状態にあつたことを思ふと、彼れの清貧振が察せらるゝのである。

彼れは、平生、米を尊重し、「これは、天祖の大御心により、私らに賜はつたものでありまた主君の厚い御情によつて得られるのである」といひ、病中でも、寢ながら、米飯を口にせず。必ず端然と起きあがつて、容を正しながら、喫飯するのを常とした。そこに彼れの至

誠の閃きを見るのである。

恩師幽谷への報恩と等身の著述

彼れは、平生、その恩師幽谷を心から推尊し、口を開けば、必ず「先師」と呼び、その著書の隨所に「先師曰」とした。かく彼れが幽谷の恩を忘れぬのは、勿論、幽谷が人物、學殖識見の上で、すば抜けて、えらかつたにもよるけれども、一つは、正志の溫情によると思ふ。師の歿後、彼れが師のために、最も殘念に思つたのは、非凡の學見を有しながら、激忙と不遇との間に世を去り、志した著述を未完成の儘に残したことだつた。

それに、當然幽谷の著述を整理し、且つ幽谷に代つて、著述の上に出精しなければならなかつた東湖も、政務多忙にまぎれて、新に學說として組織立てたものを餘り残してゐない。正志は、この事を深く遺憾とし、恩師及びその友の心を汲んで、只管、著述に精進するの決意をした。正志の書いたものが中々多いのは、八十二歳の長壽を保つたのにもよるけれど

も、一つは、恩師らの志を全うしたいといふ一念の發動にもよる。

正志の思想は、別に説くが、彼れが後進を訓戒した言葉に「口を以て書を読むことなく、心を以て書を読み」と云つたのは、正に適切である。また「士は弘毅であらねばならぬ。弘なるが故に之に安んじ、毅なるが故に少しも撓まない」といひ、或は「外夷を禦ぐのは主として謀將・猛士の任だ。自分らに至つては、外部から這入つてくる異端邪説を防ぐのが任務だ」と云つた。これに學者としての正志の覺悟と抱負とが現はれてゐる。

それから正志は、生半可の洋學者を心から嫌ひ、「近時、洋學者なるものがあつて、地理・兵法・器械などのことを説き、日本を益するのは至極よい。が、その末流―耳學問の徒輩になると、大道を知らないで、異端邪説に迷ひ、只管、外國の美を説いて、これを模倣し、その風俗上、缺陷あることを知らぬのは、慨嘆の至りだ。この點、洋學者にも責任がある。自分は、西洋人が五倫・五常の中で一番、大切な君父を輕視し、胡神（耶蘇教の神）を尊び、一君二民（一に君、二に民といふ意で一君萬民に同じ）の意味を知らぬのを陋とす

る」といふ意を述べた。要するに、正志は、日本國體の尊嚴を知らないで、皮相的な耳學問によつて、歐米文化に困迷する徒輩を喜ばなかつたのである。今、左に正志の主要な著書を列挙する。

○ 思問篇

○孝經考(一卷) ○中庸釋義(一卷) ○刪詩義(一卷) ○典謨述義(附錄共五卷) ○讀論日札(四卷) ○讀書日札(三卷) ○讀易日札(七卷) ○洙泗教學解(一卷) ○泮林好音(一卷) ○讀周官(三卷) ○正志齋稽古雜錄(二卷)

○ 閑聖篇

○新論(二卷) 迪彝篇(一卷) ○草偃和言(一卷) ○學制略說(一卷) ○退食閑話(一卷) ○及門遺範(一卷) ○下學邇言(七卷) ○責難解(一卷) ○泰否炳鑒(一卷) ○江湖負喧(三卷) ○閑聖漫錄(一卷) ○讀直昆靈附葛花(一卷) ○讀級戶風(一卷) ○讀萬我能比禮(一卷)

○ 息邪論

○豈好辯(一卷) ○千島異聞(一卷) ○兩眼考(二卷) ○三眼餘考(一卷) ○息邪漫錄初篇(二卷)

○ その他

○風簷集(二卷) ○謁柯集(二卷) ○語夷問答(一卷) ○心喪略說(一卷) ○諸家學校記聞(一卷) ○言志篇(一卷) ○正志齋文稿(四卷) ○正志齋詩稿(八卷) ○正志齋遺書(十一卷) ○人臣去就說(一卷) ○思問錄(一卷) ○銃陣論(一卷) ○辨宇麻志道(一卷) ○正志齋雜錄(一卷) ○時務策(一卷) ○禦侮策(一卷) ○巳丑備忘錄(一卷) ○西行雜錄(一卷) ○學問所建設建議(一卷) ○對問(一卷) ○會澤先生書翰集(景山逸事抄附載)合二卷。

右の分類は、一定してをらぬが、大體、二三の文獻を参照して掲げた。筆者は、正志齋全集の刊行を刻下最も必要と感ずる一人であることを附記する。

第三章 正志の日本國體論

日本國體の宣揚

日本國民のすべては、何を措いても、日本國體の上に目ざめよ！

それが、『新論』において、正志の最初に絶叫した意味である。『新論』が書きあげられた文政八年には、幕府が對外上、外國船打拂令を出したときで、西力東漸の急潮をどうして取留めようかと云ふことが焦眉の問題となつてゐた。その方策はいろいろある。國防充實も必要であり、士氣を鼓舞することも肝要だ。が、それよりも、もつと重要なことは、日本國體の本質を理解して、一致結束することが、何よりも効果的である。

故に、正志は、『新論』のはじめに、日本國體觀を披瀝した。それは、ある意味において、師の幽谷の説を繼承し、補足し、敷衍した點が見えるが、正志の創意、工夫も加はり、

幽谷のそれにくらべると、内容の上に整頓と詳密とを加へてゐる。換言すれば、幽谷の國體觀を祖述して、より多く學的要素を増してゐるのである。

正志は『新論』卷一のはじめに、「謹みて按ずるに、神州は太陽の出づる所、元氣の始まる所、天日の嗣、世々、宸極を御し、終古易らず。固に大地の元首にして萬國の綱紀也。誠に宜しく宇内に照臨し、皇化の暨ぶ所、遠邇あることなかるべし」と堂々の態度を以て、日本國の優越を宣言した。

かく正志が力強く叫んだ所以は、その次ぎに述べてゐる通り、歐米の船舶が海上を横行して、次第に東洋方面を侵略し、傍若無人の態度を傲然、示すことを、衷心激憤したからである。故に正志は、この事について、「今西荒の蠻夷、脛足の賤を以て、四海に奔走し、諸國を蹂躪し、眇視跋履して、敢て上國を凌駕せんとす。何ぞ其れ驕れるや」と詰責する口吻を洩したのである。

ところが、文政七・八年頃の形勢を見ると、國民の多くは以上の點に目ざめてゐない。中

には、歐米列強の東亞における侵略の前提を爲す艦船の横行を冷視し、「彼は蠻夷也、商船也、漁船也。深患大禍を爲すものには非ず」と日本の最大危機について心付かぬものも少くなかつた。

正志は、この有様を見て、「且是を以て慷慨・悲憤して自ら已む能はず。敢て國家の宜しく待むべき所の者を陳ぶ」と止むに止まれない立場から、日本國體の擁護を高調したのである。

支那哲學の理論を活用す

それについて一言して置かねばならぬのは正志の日本國體觀の理論には、支那の『易』哲學における陰陽説を採り入れ、且つ支那の敬天思想をも參酌してゐることである。既に『新論』の最初に、正志が「神州は太陽の出づる所、元氣の始まる所」と云つたのは、陰陽觀を背景としてゐるのである。

元來、支那古代哲學は、陰陽説を本として宇宙の理法及びその生成に及んでゐる。『易』繫辭傳においては、「易に太極あり、是れ兩儀を生ず」といひ、「一陰一陽之を道と謂ふ」と述べてゐる。兩儀とは陰陽を意味し、太極とは、絶體生命乃至宇宙の根本力を意味する。かうした絶體永遠の生命、無限無窮の根本力から、宇宙・萬物を構成するところの陰陽二氣を分出し、派生したと見るのが『易』哲學で、その陰陽觀は、一種独自の趣致を帯びて、そこに、陰陽相俟つべき必要と陽が陰に優る所以とを示してゐる。

支那の陰陽觀		
宇宙	天・日・明・暑	陽
場所	上・前・高・東・南	陰
	地・月・晦・寒	
	下・後・低・西・北	

正志の日本國體論

時	春・夏・晝	秋・冬・夜
人物	君・父・夫・男	臣・子・婦・女
人事	貴・尊・吉・福	賤・卑・凶・禍

如上の現象について、正志は、陽が陰に勝ち、また陽が陰を統ぶるのを以て當然だとし、『豈好辯』のうちで、「天尊くして地卑しきは、陽が陰を統ぶる也」といひ、或は「星月の光を生ずる、亦明を太陽に受けて、夜を照す。皆陽が陰を統ぶる也」と云つた。この意味で神國日本は、陽の國であり、陽性の上に傑出してゐる國であると正志は考へた。即ち日本は、「太陽の出づる所、元氣の始まる所」である。

蓋し天は「陽」そのものである。陽道即天道、天道即陽道といつてもよい。正志はかうした見地に起つて、陽が陰を統御するのが天の法則に協ふものと信じ、更にこれを人事を一貫

する法則の上にも適用すべきものと爲した。この意味からすれば、人間は陽道に合體することにより天道そのものに一如するを得るのである。即ち天人合一である。

更に支那においては、天を以て完全無缺のものとし、博愛慈仁を具し、至公至平を具し、人間の賞罰をも掌るものとした。即ち天を以て、絶體最高真理の象徴と見た。この敬天思想は、支那古代哲學に最も鮮明に表現せられてゐる。正志は、この敬天思想を採り入れてゐるが、それは、必ずしも、支那その儘に用ひたのではなく、之に日本的意義を附加してゐるのである。

日本國體が世界に於て卓越せる所以

勿論、『新論』には、この點を明かにしてゐないで、寧ろ自明の理としてゐるが、東湖の解釋によると、天を太陽の象徴とし、それに日本民族的思想の色合を加味して、太陽の姿を象徴せられてゐる神として、天照大御神を仰視しまゐらせてゐる。（『弘道館記述義』参照）正

志も亦、この點において、東湖と同一意義に天を解釋したのである。故に正志が頻りに「天」の文字を用ひてゐるところは、如上の概念を前提としてゐるものと見なければならぬ。

かうして、正志は、日本國體が萬國のうちに卓越せる内容に關して解説を下し、(第一)肇國の宏遠について語り、(第二)樹徳の深厚について語り、(第三)忠孝一本の道について語つた。即ち肇國の宏遠に言及して「天祖肇めて鴻基を建て給ふや、位は即ち天位、徳は即ち天徳、以て天業を經綸し給ひ、細大の事、一として天にあらざる者なし」と至公至平を以て、博愛・仁慈を以て天下を治むるの基を建てられたことを明かにした。

次に樹徳の深厚については、「天祖天に在り。下土に照臨し給ひ、天孫誠敬を下に盡して以て天祖に報じ給ふ。祭政維れ一、治むるところの天職、代る所の天工、一として天祖に事ふる所以にあらざるものなし。祖を尊びて民に臨む、既に天と一なり」と正志は述べてゐる。

それから忠孝一本の道については、「孝敬の心、父以て子に傳へ、子以て孫に傳ふ。志を

繼ぎ事を述べ、千百世と雖も、猶々一日の如し。孝は以て忠を君に移し、忠は以て其の先志を奉ず。忠孝一に出で、教訓正俗、言はずして化す」と解説した。

如上、肇國の宏遠といふこと、樹徳の深厚といふことに關しては、『日本書紀』において既に明記してゐるところである。「書紀」では、神武天皇の御詔勅によつて、日本建國の三大綱を提示し、積慶(仁愛)重暉(叡智)養正(正義護持)の三徳を天孫が下土に降臨せられて以來、具現せられてゐたことを明白にしてゐる。これを正志の云ふところに對照すると、一層、切實に正志の主張した點が判明する。

忠孝一本、乃至、忠孝一致といふことは、古代の神々が、よく天孫に奉仕し、且つ眞心を以て祖先を祭つた上においても示されてゐる。それは、日本國民の天性に出たことで、支那における儒教理論に教へられてから、生じ來つたものではない。即ち本來、古代から日本に存在した一個の美德である。かういふ風に正志は考へた。

祭政一致—政教合一の精神

要するに、日本國體の尊嚴性は、如上諸要素の結合によるのであつて、唯單に萬世一系だから尊嚴だといふ意味ではない。夙に道義建國の精神を確立して、皇道の光輝が無限無窮に發揚せられることにより、萬世一系の尊い所以を具有するのである。

正志は、かうした意味において、國體の尊嚴を力説し、然る後、「天胤の尊きこと、嚴乎として其れ犯すべからず。君臣の分、定まりて、而して大義以て明かなり」と云つた。それから正志は、稍具體的説明に入り、天祖が神勅と共に、天孫に授けられた三種の神器が、智（鏡）仁（璽）勇（劍）の徳を象徴してゐる旨を語り、智仁勇相俟つて、人君の徳を全うせらるべき所以を明かにした。

かくして正志は皇室において、政治を行はるゝに當つて、特に祭政一致の精神を基本として、理想的な善政を布き、報本反始の義に觸れらるゝ旨を説いて、日本では、古來、今日でいふところの哲人政治が實現されたことを認識した。更に正志は、正義擁護の意味で、皇室が武勇を重んぜられたことに及び、次ぎに國民の生活安定に向つて、特に大御心を注がるゝ

のが常だつたといふ點にも觸れてゐる。そこに、（一）敬神（二）尙武（三）愛民の三つが、おのづから古代政治の上に反映せられてゐたことを提示するものと見られる。

如上、敬神は祭祀の尊重によつて具體化し、尙武は軍事乃至國防の充實によつてその意義を全うし、生活安定のことは、衣食住の確保によつて、支持せられる。左様いふ意味で、正志は、以下、『新論』で、この三事をいかに正しく、満足に實現すべきかを語り、政教一新の旨を高調した。要するに。歸するところは、かくして、國體を宣揚し、國體を護持し、國體を鞏固ならしめんといふ意圖にはかならない。

それらの方針のもとにあつて、正志が力を極めて力説したのは、祭政一致の精神によつて裏付けられてゐる祭祀の内容である。祭祀は忠孝の具體的表現である。之を説き、これを語る事が、やがて國體觀念を明確ならしむべき第一の捷徑と爲したのである。故に正志は、祭祀についてかう云つた。

天祖の神器を傳へ給ふや、特に寶鏡を執りて、詔して曰く、此を視ること、猶ほ吾を視

るが如くせよと。而して萬世奉祀して以て、天祖の神と爲す。聖子神孫、寶鏡を仰いで、影を其の中に見るや、見ゆる所の者は則ち天祖の遺體なれば、視ること、猶ほ天祖を見るが如し。是に於て鹽薦の間、神人相感じて以て已むべからず。則ち其の遠を追ひて孝を申べ、身を敬して徳を修むる、亦豈に已むことを得んや。父子の親敦うして至恩以て隆なり。（『新論』國體）

かく祭祀をとほして、歴代の天皇は寶鏡の前に額づいて、神人交感の旨を體し給ひ、敬慕の念が炎の如く燃ゆるやうなうちにおいて、大孝の至情を深められた。即ちこれを義きに、三種の神器を授けられて、天位の信とせられ、君臣間の大義を明かになされたのと想ひ合せると、天祖が忠（君臣の義）及び孝（父子の親）を以て、人倫の法則を示された所以がわかるのである。正志はこの意味を説明した後、左の如く云つた。

夫れ君臣や父子や天倫の最も大なるものなり。而して至恩、内に隆に大義、外に明かならば、忠孝立ちて、而して天人の大道昭々乎として其れ著はれん。忠は以て貴を貴とし、

孝は以て親に親む。億兆能く心を一にし、上下能く相親しむ、良に以へある也。（『新論』國體）

祭祀尊重の意義を説く

かく忠の精神において、上を賞び、孝の精神において、親に親み、忠孝兩全の旨が具體化するならば、上下一體となり、日本の國體は萬世に亘つて維持せられ、無窮、無限の生命を續けてゆく。正志は、かう確信したのである。それは、畢竟、祭祀によつて、不言・不語の間に忠孝の旨が一般に理解されるからであることを思ふと、祭祀は、教化の要具として、必然、重要視せねばならない。この見地から、正志は、『新論』中に、大嘗祭の内容に言及し、その大切な意味を高調した。

烈聖の大孝を申ぶるや、山陵を主して祀典を崇ぶ。其の誠敬を盡す所以のもの、禮制大に備る。而して其の本に報じ、祖を尊ぶの義、大嘗に至つて極れり。夫れ嘗は始めて新

穀を嘗め而して天祖に饗するなり。(古は專稱には、天祖と曰ひ、群神を該すれば、天神と曰ふ)天祖嘉穀の種を得て以爲らく、以て蒼生を生活すべしと。乃ちこれを御田に種を給ふ。又口に藁を含んで始めて蠶を養ふの道有り。是を萬民衣食の原となす。天下を皇孫に傳ふるに及んで、特に授くるに齋庭の穗を以てなす。民令を重んじて、嘉穀を貴ぶ所以のもの、亦見つべきなり。故に大嘗の祭には新穀を烹熟して以て既にこれを薦む。(『新論』國體)

大嘗祭は、かうして天祖を恭しく祭つて、報本反始の旨に合致し、古代その儘の聖なる佛を茲に再現し來るの感が最も深い。故に正志は「夫れ天祖の遺體を以てして、天祖の事に膺り、肅然・優然として當初の儀を今日に見るときは、則ち君臣歡感し、洋々乎として、天祖の左右にあるが如し。而して群臣の天孫を視ること亦猶ほ天祖を視るが如し。其の情の自然に發するもの、豈已むを得んや」と述べた。そこに日本國體上、祭祀の重要性を明示してゐる。かくして正志は、國體政治としての祭政一致の事に及び、「朝政の主とする所、専ら天祖

に報じて天工に代るに在り。祭は以て政となり、政は以つて教となる。教と政と未だ嘗て分つて二とせず。故に民唯天祖を敬し、天胤を奉ずるを知るのみ。嚮ふ所一定して異物を見ず」と云つた。かうした意味において、國民のすべては、尊皇愛國に終始して、絶對に皇室に歸依・奉仕することを必務とした。

即ち皇室におかせられては、敬神(祭祀)尙武・愛民を旨とし給ひ、臣民においては祭政一致の趣旨を解して、至心、「天祖を敬し、天胤を奉ずる」といふ上に一致する。かくして、上下一體となつて、天業の發揚へ邁進してやまない。そこに理想的な家族國家が出來上つた。故にその根強い結合組織は永久に破綻せぬ。

正志の日本國體觀は、大要、右の如くである。唯正志が遺憾としたことは、かかる尊い國體觀念が時勢の推移につれて次第に稀薄となり、藤原氏の横暴、武士の專權によつて、大分、破壊された點にある。それに異端邪說(正志は佛教・キリスト教・巫覡者流などを指した)のためにも、國體觀念の混亂を生じたことを憂慮した。左様いふ混亂や破壊作用を伴ふ思想

を一排して、日本國體を明かにせよといふのが正志の希願である。

第四章 正志の政教一新説

支那の王道精神を政治の上に活かす

國體觀念を基本として非常時意識のもとに、正志が時弊矯救と面目一新を目ざして、論議したところは、各方面に亘つてゐる。そしてその原理・原則とする上では、幽谷の説に基づくところが少くない。例へば、政治上においては、幽谷が利用・厚生・正徳の三事を原則としたと同じく、正志も亦これを強調したのである。

當時、正志は(一)政治(二)軍事(三)教化のことを、不離・不可分のものとして考へ、これらの關係を考慮し、聯絡についても考ふところがあつた。先づ政治上、内政を整へて、富國策を執らねば、軍事を振興するわけにゆかない。軍事は、また教化に俟つところがあつて、唯大艦巨砲主義のみによつて、國防の任を全うするといふわけにはゆかぬ。かく以上の

三者には、密接な交渉があるので、正志は、その併行的發展を希望した。

今、先づ正志の政治觀及びその革新策から説きはじめる。彼れは、支那哲學に造詣が深く、且つこの方面でも、幽谷の深い感化を受け、王道政治の信奉者だつた。即ち厚生・利用・正徳の三事を正しく具體化するの道は、王道政治によるべきを必要とすると思つた。それに關し、正志は、『下學邇言』論政篇で、意見を陳述した。

かくして正志は、『周禮』に説かれてゐる王制—王道政治の内容を日本の政治・經濟にあてはめ、日本的要素と儒教的要素とを調和しようと思つた。そこに幽谷と多少、異なるところがある。『周禮』は、以前、周官とも稱せられ、周代の官制・禮則を周公の手で定め、堯舜以來の官制を集大成してゐる。正志は、そこに現はれた公正・雄大な王道精神に傾倒したが、厚生・利用・正徳の三事において、正志は、厚生・利用を先きとし、正徳を後として、何を措いても萬民の生活安定を保證すべき必要を最も重視した。

右の點について、『周禮』には、保息六つを數へ、(一)幼をいつくしみ(二)老を養ひ

(三)窮を振ひ(四)貧を恤み(五)疾を寛うし(六)富を安んずといふことを説いてゐる。要するに、厚生・利用の旨は、以上を出ない。孟子が説いたところも、矢張、大體において同じである。正志は、以上の考へを以て生活安定の根本的な要素の一つとして、正徳の教へは、生活安定の上に築かれ、示さるべきであることを信じた。

故に正志は、『新論』及び『江湖負喧』などにおいて、厚生・利用をいかに具體化するかに關し、彼れの考へを正直・率直に述べてゐる。左様した目途の上から、節用・節儉を必要とし、無用の事を省いて、有用のことに利すべきを説き、富商階級の重壓下に置かれた農民の苦痛を救ふべき方法を論じた。その云ふところは、積極的に生産増加の點に觸れず、富國策にも及ばず、何れかといへば、消極的に生産の分配・消費の節約に偏つてゐるが、それでも、尙ほ聞くに足るべき見解を隨所に示した。

正志の貧農貧士救濟策

蓋し正志は、幕末非常時の形勢に直面しながら、大名の多くが奢侈と傲慢とに囚はれ、武士の大半も亦姑息な生活に甘んじ、且つぐんぐん伸び出した富商が自家本位に經濟界を左右するのを憚らず思つた。左様した弊害を一排しなければ、日本の前途は暗黒であるべきことを切に憂ひたのである。

かうした立場から、正志は、特に産業統制と重農主義の必要とを高調した。正志の考へによると、元來、國の富は悉く皇室が支配し、統制せらるゝところであつたが、時勢の推移につれて、武人の手に移り、再轉して商人の掌中に移るに及んで、種々の弊害を増生したのである。元來、米穀は古代から非常に尊重せられ、天子の尊を以てすら、先づ恭しく、天神に報祭して、然る後、親しく新穀を嘗め給ふ禮を執られた。それは、元來天祖の思召によるので、五穀が國民生活の重要素を爲す以上、當然の旨であらねばならぬと正志は考へた。

正志は、更に當時の情勢に想到し、「ところが、今日はどうか。有力な商人のために、天下の經濟を左右さるゝの結果、米價の高値も、彼等の手で懸命に按配され、且つ國家有事の日

に出兵をなすについても、之に備ふべき糧がないのみならず、飢餓の年に用ふべき餘分の米もない。加ふるに、經濟上、行詰つた武士・農民らは、當面の生活費を得るために、前後の思慮もなく、どしどし米を賣り放つて了ふ。それを賣ることが多いにつれ、地方の米は減少し、都會に於ける米穀集中が行はれる。その結果、米價下落を生じて、農民も武士も共に苦しむのである。加ふるに、奢侈・贅澤の増生するに従つて、米以外の物價は騰貴の一途を辿り、之がため、一層、生活不安の空氣を濃くした。」といふ事を遺憾に思つた。正志は、『新論』の中で、左様した情勢を痛論してゐる。

故に正志は、之が矯正策として、爲政者が米價調節に力を注ぎ、米穀の都會集中を防いで、濫りに農民らに賣り放たしめぬやう、取計らうべきことを望んだ。即ち米を各地の米穀倉庫に儲蓄して萬一の場合にも備へ、自發的に米價調節を爲す事を至當としたのである。

かく正志は、農民らを經濟的に救ふべきことを考慮したが、奢侈を禁絶すべき點についても種々力説した。この點は、『新論』の中で切論したのであるが、『江湖負喧』では、一層具

體的に詳しく述べてゐる。

非常時意識の高調

彼れは、それにおいて、非常時意識を強調し、「今は五大洲の形勢一變して、西洋諸國萬里を航海し、國々を吞併し、神州へも颯を染るゝ世となり、如何程、難事なりとも、禦侮の長策を施さずしては叶はぬ世となりたる上は、大果斷を施して、天下學つて、當今は百戰の世なりといふ事を心得ざれば、いか程、奇計良策ありとも、皆々文具花法にして寸分の實事に益あるべからず」といひ、無用の用を省いて有用の務を成すべきこと、無用の人を轉じて、有用の人となすべきことを力説した。

正志が無用の存在と見たのは何か。彼れは左の如く、これを指摘してゐる。

- (一) 武家に年季奉公日傭を取る者、戰陣の用に立たず、無用也。
- (二) 天下の寺院四十九萬餘迄、其僧徒下人をかけて數百萬人、其他山伏・願人・香具

河原者等數百萬、無用也。

(三) 以上流外の者を養ひ置く穀物の徒費も過大にて、器を製し、財を通じて、右の者の用を爲して衣食するもの又幾百萬、之れまた無用也。

(四) 博徒・俳諧師の類も無用也。

(五) 全國における酒・餅・麪類に徒費せらるゝ米の量も莫大にて、之れまた無用に屬す。

正志の云ふ所は、極端だが、また反省を促すに足るべき點も少くない。

次に正志は、普通以上の贅澤を排し、「王公より士庶人まで婦女の奉養・衣服・首飾等に費す事、又上下參會の奢に費し、賄賂贈遣に費し、留守居、參會に費す事……この外にも人の財を耗さしむるもの、その類を知らず(中略)家屋・器皿に金銀・朱漆を極め、磁器・硝子朝に成り、夕に毀れ、珍獸・奇獸・異花・怪石・盆草・臨畫・園庭・堂房を紛飾し、點茶・插花・碁將棋等に財を散じ、日を費し」云々と無用の點を指摘し、非難した。

これ又極端な見方であるが、正志の云ふところにも、痛切な響きがある。

殊に正志は有力な商人の専恣に鋒を向け、「商賈天下の金穀及び百物低昂の權を握り、素封の富を致して、王公より士民に至る迄、股掌の上に愚弄し、物價騰涌して、天下の困窮となること大なる費也」と非難したに至つては、最も痛切な叫びとして聞かれる。以上の論述を終ると、正志は、無用の存在を有用化する方法について、考へを述べた。

それは、「原則として斥くべきものを斥け、賞すべきを賞し始末すべきものを正しく始末する」といふことにある。即ち心得の悪い大名を處分し、法外の奢侈に耽る重臣らを罰し、國家本位に行動する大名・武士らを賞揚して、破格の拔擢を爲すにある。更に陋風醜俗に甘んじてゐる僧侶らを還俗せしめ、農工商のうちにおいても、善風・美俗に資すべきものは之を賞する。その他、山林の開拓、島々の開墾などに力を入れて、積極的に利益を見出すべき必要あることを提言した。

その他、正志は、農民救済の問題及び富國策の一端にも觸れてゐる。貧農をいかにして救

ふか。彼れは、之について、(第一)重農思想にもとづいて農民を保護すること(第二)彼等を使用するについては農閑時を以てし、租税を輕うすること(第三)所有土地を均分制限して、富農の土地兼併を禁ずること(第四)村に十人組・五人組の制を立て、相愛互助に生きるべきことを教へた。この點、正志の云ふところは、幽谷と所見を一にする

正志の富國策と攘夷説

次ぎに富國策をどうするか。正志の見解によると、非常時意識を自覺せぬ大名らが一番いけない。彼等は、世の苦勞を知らぬ怠け者で、傲慢・贅澤のほかに長所がない。而も利慾のために、下民から搾取することを少しも氣にかけず、唯情勢の中に生きてゐる。先づ何としても、この愚昧な存在に覺醒を促すことが必要だといふことを前提してゐる。

かくして、正志は、富國策の要素として、(第一)下民の産業を助けて、その生活を安全ならしめ、(第二)舊習を一洗して贅費を去り、(第三)賢臣を拔擢して時局に當らせ、(第

四) 頽廢した士氣を盛返すことに注意すべき旨を説示した。適切とは云ひ難いが、精神的方面からかうした用意の必要なことは勿論である。

その他、政治上、正志は攘夷説を手強く主張し、國防の充實を説いた。大體、攘夷について、正志の云ふところは、固陋な見地から出たのではない。

正志は、政治上のことについて、「活眼、活機を捕へねばならぬ」と云つてゐる。従つて、彼れの攘夷説は、唯外人だから、一切を排するといふのではない。歐米列強が日本を覗うてやまぬ侵略的態度を排したのである。ロシヤ・イギリス・アメリカ・フランスその他いづれも、當時、機會さへあれば、日本の一部を蠶食しようと待ち構へた。正志はその形勢を見きはめて、攘夷精神を一時、高調せねばならない必要を痛感したわけである。

傳聞するところによると、尾崎行雄氏(二五一九)は、水戸政教學派の攘夷の叫びを聞いて、水戸學とは固陋の結晶の如く、思つてゐたところが、晩年、正志が開國説に轉向したのを書物の上に見て、驚いた相であるが、之は正志がその主張を二三にした爲めではない。

最初は、攘夷の必要があつたので、之を高唱し、晩年は漸く時勢が轉移したのを見て、開國を唱へたにすぎぬ。所謂、活眼、活機を見る方針に出たのである。蓋し彼れは、一度、攘夷を唱へて、主戰説を振りかざし、國民に窮地にある思ひをさせて、發奮・結束せしめようとしたのである。それは、背水の陣を布いたのであつた。故に之を以て正志の攘夷説を固陋視するのは、誤つた見方だといはねばならぬ。

それに、正志は、一方において、ロシヤの南下を防ぐために、支那と同盟する必要あることを説き、他方では、日本の皇道を以て歐米を導き、日本の文化を四海に弘布するの意氣・理想に燃えてゐた。即ち皇道によつて萬國の人々を平和と幸福へ進ましめ、正義の徹底を計らうとしたのである。

今、一定の策を盡して、不拔の基を立つる、必ず當に内、中國より外、百蠻に暨び、上、太初に原づき、下、無窮を要し、神聖の彝訓に遵ひ、東照の大烈を紹ぎ、謀を孫子に貽し、繼々承々して、千萬世一日の如く、必ず四海萬國を塗炭より極ひ、天地の間を

して復た西夷の妖教あることなく、中原の赤子をして永く胡羯の欺罔を免れしめて然して後、己むべし。(中略)それ仁、四表に被り、荒要と雖も、猶ほ子愛して之を見視するは、荒要をして天朝を父瞻せしむる所以也。(『新論』長計)

以上の如く、正志は、歐米人をも撫愛して次第にわが皇道に心服せしめ、日本精神の光明を以て歐米を照破しようとした。これを以て見ても、正志の攘夷説が固陋一邊のものでないことが明白である。

正志の國防充實論及び開國説への轉向

次ぎに正志は、國防充實に就て、兵事上の新知識を發表して、日本軍隊の近代化を意圖したが、別にそれと併行して、精神的に奮興せしむべき必要にも觸れた。即ち神國日本の軍隊は、日本の神々の思召に聞き、「天神の糧を食ひ、天神の兵を揮ひ、天神の仁によつて、其の威を奮ひ、以て天下に方行し、挾き者は之を廣うし、險しきものは之を平げ、神武不殺の

威、殊方絶域に震ふ」といふことに重點を置いた。

神に清められた軍隊、神の旨に協ふた軍隊が、神の御力によつて進軍するところ、之に抗し得るものはない。歐米列強の精兵とて、この仁義の軍に双向ひ得ない。正志は、かう感じて、國防上の物質的設備の近代化を必要とすると共に、軍隊を力強く思はしめる精神的國防の重要素にも亦特に重きを置いた。かういふ考へ方をした上に、やはり、正志の特色が見える。

それから正志が攘夷から開國の方へ轉じたのは、彼れの卒去する前年のことで、其の趣旨とするところを時務策として、徳川慶喜に進言したのである。その中において、正志は、「時勢を斟酌ありて權宜の道を用ひ給ひ」云々と前提し、次ぎに西洋諸國の形勢に見て、日本の孤立を不可とする所以を論述した。

今時の如きは、外國甚だ張大にして、萬國盡く合從して皆同盟となり、譬へば春秋(支那の春秋戰國時代)の時に、齋桓・晋文盟主となり、諸侯を合せて好を通じ、若し諸侯

の中に會盟によらざるものあれば、諸侯兵を合して是を伐つ。是によりて一日も孤立して國を保つことを能はず。今、外國の勢も亦かくの如し。是と好を結ばざる時は、外國を盡く敵に引受けて、其の間に孤立はなり難き勢なれば、寛永の時とは、形勢一變して、今時、外國と通交は、已むを得ざる勢なるべし、(時務策)

かく正志は、實地の形勢に看到つて、時宜により、開國せねばならぬとした。それは、豹變でもなく、變説でもなく、時の勢を察して、かく進言したのである。これによつて見ても、正志が常に海外の形勢に注意して、適當に善處しようとしたことが判明する。

如上、正志の政治經濟觀の主要である。それから、彼れが、いかに教化について注意したかについて、茲に略言する。教化に關する正志の考へは、彼れが國體崇敬と祭祀尊重とを説いたことによつて、略ぼわかるが、約言すると、國體を明識せしめる教育を以て、一般を感化せねばならぬとした。即ち忠孝一本の精神を高調して、日本國民のすべてが之を實踐せねばならぬとすると同時に、國教としての神道に傾倒して、祭祀を嚴かに爲すべき旨を勧めて

やまない。故に彼れは、『新論』中に再び繰返して、根氣よく之を説き、『江湖負喧』の中でも、「祀禮を崇敬して天下の人心を一にする事」といふ一章を設けて、その意の存するところを力説した。要するに、彼れの教化に關する考へは、その國體説によつても、察せられるから、茲には、これ以上、觸れることをやめる。

惟ふに、正志の政教一新説には、尙ほ洩らされた重要點や言及しない必要事もある。が、日本國體に基本を置いて、時代の現實に肉迫し、よく適宜の方法を考へ出したところに、彼れの非凡の見解が閃めいてゐる。それは現在の超非常時に向つても暗示する所が少くない。

第五章 正志の宗教觀と儒學觀

國家主義の立場

水戸政教學派の宗教觀は、藤田東湖・會澤正志らの時に至つて、最も明瞭な形を執つた。殊に正志は、東西の宗教における是非・得失を比較的詳しく論じ、且つ合理的傾向を帯びたところに、特長を示したといつてもよい。

本來、水戸學派は最初から神儒一致的傾向が強い。水戸史學派においても、左様した色合が、早くから浮び出てゐる。勿論、義公は、中立の態度を執り、いづれにも、偏らぬ風を示したが、やはり、神儒を重んじた傾向が相當に強い。それから義公のもとにあつた安積澹泊・三宅觀瀾・栗山潜鋒らに至ると、神儒尊重と同時に、排佛の氣焰をあげ、國史上の事例などを引用して、これを論難したのである。

かうした傾向は、幕末非常時の趨勢に刺戟せられて、神儒一致の考へを確立してゆくと同時に、排佛・排耶の態度を明かにし、老莊に向つても亦不滿の意を表明するに至つた。それは時勢上、日本の國教たる神道を擁護し、且つ五倫・五常を重んじた儒教の採るべき點を明白にせねばならない必要に迫られたからの事と思はれる。

惟ふに、正志・東湖らの宗教批判を爲すところの重點は何れにあつたかといふと、(第一)それが日本國體に合致するや否や(第二)それが日本國民性・民族性に合するや否やといふ上にあつた。水戸學派は、その理論の深奥であるか淺露であるかといふやうなことを第二位に置き、先づ日本國體の内容と宗教の内容とを照らし合せて、是非を判斷すべきことを大切とした。且つ日本國民性・民族性を重視してこれに一致するといふことが、宗教の一要件だと信じた。左様した立場から、佛教及びキリスト教を以て、非國體的、非國民的存在と見るに至つたのである。

かかる態度、かかる判定を爲すことについて、佛教側・キリスト教側に不滿の意あること

は、無理ではない。が、正志らの云ふところも亦必ずしも、偏狭・固陋なものだと云ひきれない部分を有する。少くとも、一面において、首肯すべき節もある。それに、正志は感情の上からではなく、彼れの理性の上にも照らし合せて見て、相當、聞くに足るべき所説を示した。従つて一概にこれを偏狹視することは出来ない。

正志の排佛主義における理論

正志の排佛論の理由は、どんなものであるか。先づこの方面を點檢しよう。之に先立ち一言すべきことがある。それは、當時、思想上、日本國體精神を以て、全國民を統一せねばならぬ事情が切迫した際にあつた。即ち思想上において、いろいろに分裂し、或は分派したとなると、どうしても、内において思想的結合を純一に堅固にすることが出来ない。故に正志は、非國家的・非國民的と見た宗教に對しては、理論上から之を克服せねばならぬ旨を痛感したのであつた。

彼れの排佛説は、最初、『新論』の中に説かれてゐるが、それは、國史上における崇佛の弊害及び佛陀なるものが蕃神だといふ理由で之を排撃してゐるにすぎない。云ひかへると、多數僧尼の墮落、佛寺建立に關して巨費を注ぎ込んだことなどを非とし、排佛を唱へたところが多い。

が、その後、『下學邇言』論學篇で、排佛を高調してゐるのを見ると、『新論』の説よりも、大分、理論的になり、佛教の内容にも言及した部分がある。その當否は兎も角、正志は、左の如く、佛教の缺點を指摘した。

(第一) 佛教で生者の道を捨て、身後の禍福を説くのがいけない。

(第二) 君父を指して假合とし、人生を火宅に譬へて、生を憎み死を喜ぶのがいけない。

(第三) 兩親が死んでも哀まず、愛兒が亡くなつても悼まないのは人情に反する。

(第四) 一身の成佛のみ考へて、天下・國家を輕視するのがいけない。

(第五) 説辯・怪論を操り、隱を求め、怪を行ふのもいけない。

以上の如く、正志は、佛教の缺點を列挙して、その寂滅的・非國家的・非人情的・個人本位的な傾向を非とし、教學上、利少くして害が多いことを難じた。且つ正志は、佛教を以て、陰道とし、陽道に反するところが好ましくなく、日本國民性の陽道的なものと一致しない所以を『下學邇言』中に論述した。

佛は四方の道、老子と相類し、智を以て旨となす。智は仁に對すれば、陰となる、西方は陰に屬す。而して寂滅を道となし、清虚恬淡を貴び、徒に知者の惺々を喜ぶ。而して仁者の生々を知らず。心を以て鏡水と爲し、持戒靜座、務めて塵垢を去り、以て眞心を求む。(中略)有より無に入るものは陰道也。(『下學邇言』論學)

正志のいふところは、主として佛教の小乘方面に觸れ、大乘方面に觸れないところが見える。それに、佛教の日本化といふことを一向考慮の中に入れてゐない手落ちもある。が、「佛は四方の道……智を以て旨となす」と云つたのは、確かに一面を穿つてゐる。且つ小乘

方面に關する限り、正志の言にも相當命中した點がある。

正志の排耶主義の理論

それから正志が、排キリスト論を提唱した理由はどうか。この事も、最初、『新論』において、高調し、歐米では、侵略の手先きとして、キリスト教を利用せる不都合を指摘し、辯難の鋒先を向けた。その排斥の理由は、主として、侵略の觸手となる點にある。

西荒戎狄に至りては、則ち各國耶蘇の法を奉じ、以て諸國を吞併す。至る所、祠宇を焚毀し、人民を欺罔し、以て其國土を侵奪す。其志や盡く人の君を臣とし、人の民を役するに非ざれば、則ち慊らざるなり。(『新論』國體篇)

正志は、右において、キリスト教の内容には一向、觸れなかつたが、『豈好辯』においては理論上から、キリストを論破する態度を執り、その云ふところ、往々、キリスト教の弱點を鋭く突いてゐる。これを佛教に加へた論難にくらべると、より合理的だと思はれる。

正志は、キリスト教が天主なるものを尊奉するの非合理を指して、「西夷の所謂天主なるものは、夷輩の名づくるるところにして、本、意想に出づ。故に萬物を以て胡神の造る所と爲し、嚇かすに身後の禍福を以てす」といひ、またキリスト教の天地創造説を攻めて「其の天地のはじめを説き、身後の状を言ふ、鄙俚猥瑣、躬、其の地に到りて、親しく之を見るものゝ如し。夫れ誰か之を見、誰か之を傳ふる。天地の間、豈にこの理あらんや」と云つた。

正志は、かくキリスト教を部分的に難じたが、更に之を各方面から、考察して、神儒二道にくらべ、彼れが非とする理由を列擧して鋭く肉迫したのであつた。

(第一) 神道・儒教は萬民をして懽喜・和樂させるが、キリスト教は蹙縮・哀號せしめる。

(第二) 神道・儒教は萬民をして不知不識善に移り罪に遠ざからしめるが、キリスト教は、唯罪を悔い、憐を乞はしめる。

(第三) 以上の結果、神道・儒教は向上的で一脈の生氣を帯びてゐるが、キリスト教は、

退嬰的で、氣象素然、甚だ振はぬ。

正志は、右の如く論難したに留らず、その言葉が、士民を惑はせ、陰道・死道に赴かしめる傾向あるを嫌つた。即ち正志は、『豈好辯』の中で、舌頭を鼓して、「其の死後の禍福を審判し、其の理隱怪、生民得て知るべからず。其の事、生民の用に非ず。王制を外にして、私かに自ら福を祈るは、以て僥倖を教ふるに足る。其の略はすに貨利を以てするは、以て貪心を長するに足る。貪にして僥倖、將た何の至らざる所かあらん」と論破した。

正志の云ふところは、必ずしも、感情的でなく、相當に理性的なところがある。唯何れかといふと、キリスト教の短所を擧げるに急で、長所を見ることを潔しとしないやうな點がないでもない。勿論、キリスト教の日本化はまだ當時、全く行はれてをらず、加ふるに、侵略の觸手の如く見られてゐたから、正志の論難が苛酷に流れたのも亦止むを得なかつたことも知れない。

正志の日本神道論

以上正志の、排佛・排耶について述べた。次ぎには、彼れが、いかに日本神道を見たかに
ついて、一應、瞥見したいと思ふ。由來、水戸學は、最初から、神道第一主義である。この
事は、藩祖威公（二二六三—二三二一）の時に始まり、義公の時代に至つて、一層、その根柢
を固めた。爾來、それは一つの傳統化した觀がある。蓋し日本國體と神道とは、不可分の關
係にあつて、相即不離であり、且つ日本國民性の生々光明的な氣象に合致した宗教として
は神道に越ゆるものはない。

左様いふ意味から、水戸史學派も、政教學派も、ひとしく、神道を尊重し禮讚したのであ
る。かうした傾向は、正志に至つて、益々顯著で、『新論』の中には、隨所に神道の長所を揚
言してゐる。

昔、天祖神道を以て教を設け、忠孝を明かにして以て人紀を立てたまふ。其の萬世を維

持する所以のもの、固より既に瞭然たり。太古に始まりて無窮に垂る。天孫奉承して以
て皇化を弘めたまふ。天神、教を設けたまふの遺意に非ざるはなし。太祖の征戰、毎に
神威に仗り、以て武功を成したまふ。太祖の中土を平げたまふや、先づ神祇を禮祭し、
日神の威を背負して進戦したまふ。其の劔を提げ、頭に八咫鳥を以て郷導と爲した
まふ等の事の如き、天神の教を奉ずるもの、而して天神地祇を丹生川上に祭りたまひ、
道臣に勅して高皇產靈尊を祭らせたまふの類、皆神威に仗らざることなきなり。（『新論』
長計）

以上の記述を見ると、正志が深く神道に心を傾けたことが判明する。「天祖、神道を以て
教を設け」云々とある文字は實に眼目であつて、天照大御神の時から、神道を國教となされ
た所以を想察することが出來よう。

従つて、神武天皇及び崇神天皇が神道崇奉の精神を發揚なされた美事は、史上に光を放つ
て、深く國民の頭腦に印象せられたが、尙ほ朝廷においては、天社・國社を定めて、全國の

神社を統一し、神地・神戸を設けて諸神の奉供に事かかぬやうにせられた。且つ兵器を以て、神を祭り、之に軍令を寓し、險阻・要害を固められたのである。それらによつて、神道に對する尊信の深かつたことがおのづから、明確にせられ、國民も亦その向ふところを知るを得た。

正志は、かう云ふ意味を述べ來つて、神道が久しい以前から、國民的宗教として一般に認められた所以を明示し、至誠を傾けて之に歸依せねばならない旨を人々に告げたのである。

祭祀の重要意義

以上に連關して、正志は、『新論』で、念に念を入れて、祭祀の重要性をまた繰返し説いてゐる。勿論、それには、年々行はれる朝廷の祭事に關する意義を明かにし、それによつて、神道の本質に觸れやうとした意圖が見える。

今、正志の云ふところを平明に意譯すると、それにおいて、「萬民に神道崇敬の意味を教

へるには、祭祀の内容を説くに越したことはない。祀禮には、數があり、義がある。其の數を陳べんとするについては、先づその義を明かにしなければならぬ。抑々天子が天神・地祇を祭つて、天祖に奉仕するものは、天に報い、御祖先を敬ひたまふためである。地主神・保食神を祭るのは、國土の平和を祈り、民生を豊かならしめやうとの思召にある。(中略)宮中の御巫・座摩・生島などの祭があるのは、天孫を保護して、國家を治めた功勞による。祀典の目においては、踐祚・大嘗祭を大祀とする。この祭は、天皇が、即位なされた際、天祖にその旨を報告するのであるから、最も崇敬せらるゝのは申す迄もない。祈年祭は時候がよくて五穀が豊かに實るやう、全國の諸社に祈る意味を持つてゐる。月次祭は幣帛を天社・國社へまゐらすので、人民が家にある神を祭ると同様だが、要するに、その意味は、惠澤を萬民へ及ぼさうとせらるゝところに存する。新嘗祭の義は大嘗祭と同じであつて、毎年行はれる。以上の諸祭は中祀である。皆萬民の生活安定と國家の平和とを旨とし、且つ天神に報いまるるるためになされる」と明快に懇切に諸祭の意義を解説した。

正志は、尙ほ言葉を續けて、「伊勢の大神宮には、神衣祭かみみそまつりがあつて、大神が機殿で織りなされたことにちなみ、神衣を供へる。また神嘗祭があつて、九月の神衣祭の日に行はれる。惟ふに、天照大御神が嘉穀を頒ち、養蠶を教へられた御恩に報い奉るので、これまた中祀である。その他、大忌・風神・鎮華・鎮火などの諸祭の如き、或は水澤に祈り、或は沴風を攘ひ、或は疫病神を鎮め、火を防ぐなどを意味する。それらは、小祀である。いづれも國家のために災を攘ひ、福を祈るためにはかならない。かく祭あれば、必ずその意義がある。故に朝廷で、祭を行はるゝならば、その意義が四方に通じ、報本反始の義と民のための攘災祈福の義とが、一般的に意識される。即ち上は下のために祭を爲し、下は上の爲し給ふところを仰ぎ見て、之に随順する。之により、人心の純一と歸一とを見ることが出来る」と述べた。

尙ほ正志は、最後に大嘗祭の意義に言及して、「古へ大嘗祭には、二月から九月の間に、悠紀・主基の國郡を卜定して、宮主・卜部を派遣し、田に臨んで稻穂を抜き取り、それを用ひて、神饌・神酒を造つた。天下、どの地方でも、齋田に撰ばれるわけだつたから、人民は

皆卜定されると、眞心こめて働き、大祭の御用米を奉るのを光榮とした、かくして天皇が天神に事へられ、祖先を祭つて大孝を申べたまひ、民の生活を重んぜらるゝは心が全國に徹底して、明白に知らるゝのである」と云つた。正志の説くところ、述べるところは、神道の組織化・體系化の方面に觸れてはをらぬが、神道の本質を知る上では、極めて効果的で、有意義だと思はれる。要するに、正志は、神道を以て、日本の國教とすることの當然なるべきを裏書したのである。

正志の儒學觀

最後に語るべきは、正志が如何に儒學を見たかといふことである。崇儒といふことは、水戸學の傳統である。威公以來この方針は一定して變らない。が、崇儒とは、儒學を神道と同程度で、重視するといふ意味でないことは、勿論である。それは、排佛・排耶とちがひ、或程度迄、儒學を重んずるといふのである。

その重んずるといふのは、日本國體を理論付けたり、神道の内容を整頓したりする意味に役立つ點があるによる。即ち神道は主體だが、儒學は客體である。崇儒とは、さうした意味で、無暗に儒學を崇拜するわけではない。

勿論、水戸政教學派の中で、正志は最も深く儒學に接近し、その理論を見ると、儒學上の言葉や事例や名言などを採り入れたところが多い。『新論』の中の神道説の部分などには、殊に儒學の説などを多く用ひた。そのため、趣旨の解説を爲す上に混亂を生じた部分さへある。けれども正志の本意は、程度はづれの崇儒でなかつたのである。

が、彼れは、幽谷以上に儒學に接近して、これを讚美することを惜しまなかつた。その『下學邇言』における論道・論學の二篇は殆ど儒學に關する衷心の共鳴を披瀝してゐるの觀がある。但し正志は系統上、古學派に屬してゐた。彼れは朱子學を尊敬したが、その心性説については、必ずしも、傾倒しなかつたのである。

蓋し正志は、幽谷の學統を繼いで、孔子教に直面するのを第一義とし、孔子直授の經文に

絶對的權威を認めた。故に「聖人の道を學ばんと欲せば、當にこれを聖經に求むべくして、宜しく新奇を求むべからず」(『下學邇言論學』)と云つた。ところが、朱子らは、聖經以外に自説を立て、新奇ならんことを求めたので、正志はこれを好まなかつたのである。従つてこの點を非として、「豪傑を以て自ら任じ、其の創立する所は、必ずしも經文に據らざるなり」と云つて、ともすると、老佛的色彩を思惟の上に示して高妙を銜ふの弊あるを非とした。

かうして正志は儒學に衷心の共鳴を表明したが、それは、孔子教そのものを推尊したのであつて、他は一切、振返つて見ようとしなほどの熱意を示した。この意味から、彼れは幽谷の孔子教禮讓の語を援用して、「孔子既に没し、遺經猶ほ存す。而して歷世の賢人・君子亦對からずとなす。賢者は、其の大なる者を知り、不賢者は、其の小なるものを識る。其の識る所の大小は、同じからざるものあり。と雖も、之を事業に施し、之を言語に載せ、之を文章に著はす。孔門の學は未だ曾て絶えざるなり」の意を明かにした。

蓋し正志は、道は至易・至簡であらねばならぬとし、躬行實踐を旨とすべきを信じ、この上から孔子教に汲んでつきぬ滋味の永遠に湛えられてゐることを知つた。従つて、彼れは、先師幽谷の遺意を繼承して、孔子教の祖述・鼓吹に少からぬ力を注いだのである。今、左に正志の孔子教における要點を闡明した語を録して、この篇を結ばう。

聖人は陽を貴ぶ。其の道は仁を以て旨となす。仁とは親愛の徳にして、心に根ざして事に施す、發生長養して、内より外に達し、己より物に及ぼす。其中實して活動し、以て進むものは陽の徳なり。其の教へは天叙によつて人倫を明かにす。曰く、徳行道藝、曰く、文行忠信、曰く博文約禮、曰く、詩書執禮、皆教ふるに實事を以てして空言を以てせず。的然として著明なること、太陽の當に天に冲するが如し。易簡にしに知り易く、人をして徳を進め、業を修め、生々として息まざらしむるものは陽の道なり。(『下學邇言』論學)

藤田東湖

第一章 藤田東湖が歩いた道 (上)

東湖の修養時代

水戸の人物中、ひろく、海の内外に知られてゐるのは、藤田東湖である。彼れは、幽谷の次男で、水戸上町梅巷（梅香）に生れた。諱は彪、字は斌卿、幼名を武次郎といひ、後、虎之助と改めた。

彼れは、父幽谷の美質を享け、且つその薫育のもとに成長したから、夙に飛躍を爲すべき素質を持つてゐた。東湖がはじめて學問を修めたのは六歳の時で、『孝經』の句讀を堀川潛藏に授けられた、それから八、九歳の時分、父幽谷が晩酌に酔ひ、陶然となつたとき、文天祥の「正氣歌」を夜毎に朗吟するのを聞いて、不知不識、深い感化を受けたのである。

その後、やがて十四歳になると、友人豊田天功（二四六五―二五二四）と共に、江戸に遊學

し、龜田鵬齋（二四二—二四八六）太田錦城等について文學を修め、また岡田十松の門に入つて撃劍を習つた。そして數十日を江戸に送つた後、水戸に歸り、父のもとで、文武を勵んだのである。爾來、十九歳に至る迄、父の指導によつて、天性の美質を十分に琢磨した。

當時、西力東漸の勢は、漸く烈しさを加へ文化五年、イギリスの船が浦賀に來たといふのを東湖等も知つた。ところが、同七年（東湖十九歳の時）イギリスの商船が常陸の北岸、大津の湊に入り、一隊のものが小船に乗つて上陸したのである。村人は、すぐ彼等を引捕へたが、爾來、イギリスの船は帆をあげて度々、海岸に近付き、時々、大砲を放つて、海邊の漁民を驚かした。以上の事は、幽谷の傳記中に述べて置いたが、左様いふ外人の態度は、東湖の愛國心を強く刺戟したにちがひなかつた。彼れは、外交國難排除の必要を泌々感じたのである。

やがて文政八年、東湖が二十歳になつたとき、再び江戸に遊學し、岡田十松の撃劍館に通ひ、更に翌年三たび江戸に出て、伊能一雲齋について、寶藏院流の槍法を學んだ。當時、幽

谷も藩用で江戸に出てゐたので、折を見て、親しく東湖の發奮を促したことは、既述した通りである。

それから間もなく、幽谷は病床に臥し、危篤の報が東湖のもとへ來た。當時、彼れは撃劍場にゐて、ひたすら武道の鍛錬にいそしんで時の經つのを忘れた位だったが、「父危篤」の急報に接すると、日夜、道を急いで水戸に歸つた。が、もう幽谷は最後の呼吸を引取つたので、之と言葉を交はすことが出來ない。孝子東湖の悲しみは非常に深かつた。それは文政九年十二月のことである。

幽谷歿後の東湖

東湖は、今となつて、幽谷の訓言を思ひ出した。父が懇切に東湖の修養について注意した言葉が、もう遺言となつたのである。平生心をつくして自分を指導してくれた父を、もう再び見ることが出來ぬ。かう思ふと、東湖は胸が一杯になつた。

當時のことは、彼れの日記に書かれてゐるが、父歿した翌文政十年の正月元日が、東湖に取つて、極めて淋しいものであつたことを記し、「豈圖らんや、不幸、大難艱に遭はんとは。牀蓐の間に酒餅に薦めんと欲すと雖も、復た得べからざる也。嗚呼哀しい哉。因て凄然自ら禁すること能はず。噓唏流涕良久す」と云つてゐる。

その後の日記を見ると、毎日、亡父の夢を見たことを記し、一月十九日のところには、「三たび先考を夢む」と書いた。いかに彼れが亡父を哀慕したかが、左様した記事の上に流露してゐる。かうして東湖は、爾後、三年の心喪を守つた。

やがて東湖は、父の跡を継ぎ、文政十年二百石の俸祿を賜つて、進物番に任用され、史館編修を兼ねた。それは、彼れの二十二歳の時である。その時分から、東湖の偉器は、自然、人の知るところとなつたが、一方、有名な幽谷の子としても重きを爲すといふ具合であつた。

當時（文政十二年五月）の日記によると、水戸方面の海岸が、外國船の來るため、物騒

で、ともすると、東湖の神経を、強く刺戟した様子がわかるのである。東湖は、「時勢嘆すべし」と云つてゐるが、この短い文句の間に無限の感慨が溢れて、東湖の切齒した姿が浮んでくる。

この年、東湖は、二十四歳で、彰考館總裁代役となつた。それは、父が久しくこの職にゐた爲めと思はれるが、一つは、東湖の人物・文章・才學が拔群だつたからであらう。當時、館中には、東湖の先輩もをり、老儒もゐたので、東湖は、その信するところに従つて、積弊を一掃することのむづかしい事情を知つた。それ故、彼れは早く辭意を抱き、その胸中を先輩、青山拙齋（二四三六一二五〇三）に告げたのである。

同年七月四日の日記を見ると、簡單にその旨を書いてあるが、東湖の改革箇條は、凡そ五つあつた。それは（第一）心術正しくないものは館職にをらしめてはならぬこと。（第二）正しい人物及び實學は捨て、ならぬこと。（第三）東湖が館職を攝するのは不適任であるから辭職したきこと。（第四）史學の進行については餘り烈しく督促してはいけないこと。（第四）

『大日本史』の文章上、虚文・虚辭を用ひぬやうにしたことなどである。

その眞意は、決局、『大日本史』を立派なものとして、義公の遺意を顯彰しやうといふ上にあつた。そして東湖が當時、素行の修らない川口綠野が江戸史館總裁の地位にゐるのを彈劾したのも、私情から出たのではなく、大體、右の如き趣旨によるのである。

郡奉行としての東湖

かうして東湖が水戸史館總裁の地位を辭しようとしてやまなかつた折柄、水戸に動搖が起つた。それは藩主哀公（齊修）が大病に罹り、而もその後繼者が定らないで、藩内の人心が不安に陥つた事だ。その事は、正志の傳記中で既に述べた通りである。

元來、哀公は文事の嗜みが深く、聰明の人だつたが、多病のため、一度も國に就いたことがない。藩政一切を家老赤林八郎右衛門に委ね、赤林の爲す儘に放任して置いた。そのため、藩政は行詰り、士民の窮乏、次第に加はつたのである。

かかる際、藩主の大病と共に、繼嗣が定まらぬ事は、一藩の運命を危機に導くものとして憂慮の情を深めた。當時、心あるものは、何れも、哀公の異母弟敬三郎君（後に烈公）に望を囑したので東湖も率先、同志と共に、その擁立運動に努力し、決死の覺悟で江戸に赴いた。その消息は『回天詩史』に詳しく傳へられてゐる。

かうして東湖の熱誠が、天に通じたか、その年（文政十二年）十月、敬三郎君が、哀公の薨後、藩主となるに及び、東湖等は、ほつと安心した。

さて烈公の時代になつて、新しい氣運が動くと、東湖は天保元年、郡奉行に任用せられ、最初、八田郡を治め、後、太田郡を治めた。

八田郡は、水戸の北方、六里ばかりのところにあつて土地瘠せ、住民も貧しいところだつた。當時、二十五歳だつた東湖は、郡宰として、八田村にをり、毎日、役所へ出て老吏たちと民政上のことを講究し、在來の制度でよいものは、變更しなかつたのである。

その年（天保元年）冬、東湖は、君命に接したので、江戸の藩邸に赴き、彼れが平生、信

するところの治民策を進言し、文武二方面をいかに發達せしむべきかといふことを述べた。烈公は、深く東湖の忠誠才能に望を囑し、親筆を賜うて、彼れを愛重するの意を示した。

その後、天保二年正月、藩内の七郡を合して、四郡としたとき、東湖は太田郡の奉行となつた。この地方は、土地肥えて、民の生活も割合に豊かだつた。この郡奉行時代に、東湖は、他郡の奉行と施政について相談し、略ぼ在來の行き方を守つた。が、東湖は、素より無爲を好まぬので、貧農救済に力を入れ、常平倉を太田・部垂・大子の三箇所に設けやうと考へた。

蓋しそれによつて、米價の急落や暴騰を防ぎ、姦商をして私利を食らしめず、一般の生活を安定させやうと考へたのである。そして彼れの在任中、太田・部垂の方面には、その希望を實現したが、大子にまで及ぼすことが出来なかつた。

その時分、東湖は、時々、部内を巡視して民情を知ることにとめたが、在來の奉行のやうに、贅澤はしなかつた。巡視中、彼れは好きな酒を謹み、粗食に甘んじて、農民同様の生

活をした。そして彼れは、人々に厄介をかけぬやうに注意したのである。唯彼れの樂しむところは、山水の勝景に對して、詩作することだつた。

惟ふに、郡奉行としての東湖は、その大きい抱負と旺んな意氣のもとに、郡政を一新したいと考へたが、その周圍には、とかく舊例を喜ぶものが多いので、何事も自由にはならぬ。それ故、東湖は、たびく烈公に書を上つて、小人を斥け、君子を重用し、政治上、正しい道が行はれるやう、頻りに策を獻じたけれども、途中に遮るものがあつて、目的を達し得ない。依て天保三年二月、辭職を申出たがこれ又許されない。

東湖は、不平で堪らぬので、僅かに酒を飲んで、煩悶を抑へてゐた。そして天保三年四月、烈公に封事（壬辰封事）を上つて、政治上の改革斷行を勧めた。この封事が烈公の心を動かしたと見え、やがて五月下旬、郡奉行から、江戸通事の職に轉ずることを命ぜられた。そして七月、東湖は、江戸の官舎に入つたのである。

烈公の左右に侍して政治上に貢献

その時分、東湖は、烈公の命によつて、『神書明訓管窺』などを編述した。それから天保四年、烈公が藩校、弘道館を創設するに當り、東湖は、そのために、いろいろ力を盡した。當時、東湖は書を烈公に上つて、その所信を披瀝し、「尊慮の神儒一致の學校御建立に罷成り和學の漢學のと申すこと無之、唯學問と唱へ候様なる風俗に相成り」といひ、神國日本の道を本として、儒教の理論で、之を補ふ方針を最も正しいとした。

また東湖は、烈公が北門の經營について根本策を建てようとしたとき、極力、これに同意し、天保五年九月、時の閣老、大久保加賀守に一書を呈するに臨み、數回に亘つて、烈公と協議した。その殖民策は、烈公の意見を本として、東湖が訂正・執筆したのであるが、可なり進んだ考へを述べてゐる。

それについて、東湖は、北海道方面を開拓するについて、多くの人手を要するので、同地

に大仕掛の酒樓・遊里・劇場などを作るべきことを勧め、育兒館を設けて、兩親の手に養はれない不幸の子女を一切收容し、また内地の男子とアイヌ婦人とを結婚せしめる必要などを説いた。こんな具合に、東湖は、烈公の北門經營を支持し、その實現を切に希望したが、幕府當局の無理解なため、實現を見るに及ばなかつた。

その後、天保六年、東湖は通事から轉じて御用調役となつた。この役は、奥右筆頭所の上にあつて、その事務を監督する職で、東湖にふさはしい役柄だつた。従つて、東湖は以前にくらべて、一層その志を伸べる事が出来る境遇に置かれたのである。

たまく／＼天保七・八年に亘つて起つた大飢饉は、全國に及んだが、中にも、關東地方は殊にひどかつた。その際、東湖は烈公を補佐して、藩内の士民救済に最も力を入れたので、一人の餓死者をも出さないで濟んだのである。が、それから來た財政上の打撃は可なりに大きく、水戸では、斷然、士大夫の俸祿を半減した。

之に對して、藩内の保守派は、烈公の處置を非とし、反抗的な態度を執つた。それで天保

十年、江戸にゐた烈公が、藩情視察のために、歸國しやうとすると、それを拒むといふ風だつたから、烈公は怒つた。その結果、保守派を斥けて、東湖らの進歩派を重用するやうになつたのである。

烈公を輔けて藩政改革

かくして天保十一年、東湖は進歩派の幹部として、側用人の地位に進み、續いて彼れの同志、戸田蓬軒（二四六四―二五一一）は家老に、武田耕雲齋（二四六三―二五二五）は若年寄となつた。當時、東湖は、三十五歳で、元氣正に旺んであつたから、魚が水を得たやうに、潑刺たる手腕を揮ふことが出来る端緒を得た。

惟ふに、烈公は、早くから藩政改革を企圖したが、種々の事情で、文政十二年の襲封當時から天保十一年の春になる迄、在國したのは僅か一年（天保四年三月―同五年四月）にすぎない。従つて烈公の志すところを實現する丈の時日に乏しく、不本意ながら、その儘に打過入つた。

きた。勿論、その間も文書によつて江水間の連絡を取り、種々計畫したが、双方の事情・意志の疏通せぬため、失敗に終つたのである。それ故、烈公は斷然、歸國して、親しく、改革の衝に當らねばならぬことを痛感し、天保十一年正月十三日、江戸を出發、十六日、水戸に入つた。

その際、東湖は、烈公に隨從して歸國するに當り、將軍家慶及びその世子に謁するの榮を得た。そして歸藩後の東湖は、烈公の藩政改革を翼賛して、日夜、寸分の暇さへないほどだつた。蓋し烈公の改革は、姑息を許さず、因襲に囚はれず、思ひ切つて、各方面の積弊を根こそぎに一掃し去らんとしたのである。その贅澤を禁じ、浪費を制するについては、寧ろ苛細に亘ることを辭しない方針を執つた。かの水野越前守（二四五四―二五〇七）の天保改革は、烈公の爲したところによつて、有力な暗示を得たといはれる程だから、いかに烈公が急進的であつたかが分る。それは、全く疾風迅雷にひとしいところがあつた。

勿論、烈公は奢侈を排し、懦弱を斥けるために、舊弊破壊のみに熱中したのではなく、一

方においては、新しく、意義ある建設をした。それには、東湖が事毎に參與したのである。そこで烈公は、平生の抱負・理想に基づいて、教育に、國防に、農政一新に頗る力を盡した。その具體化が藩校弘道館の創立となり、軍事上に洋式を採り入れることもなり、社會政策の活用ともなつた。それから宗教界の肅正、神道の興隆といふことについても、少からぬ力を入れたのである。

非常時の思想國難と弘道館創設

烈公が、弘道館を設立するに當つては、主として、東湖の意見を用ひた點が多かつた。館内に孔子と共に、建御雷神を祀るに至つたのも、東湖の進言による、またその學部の分け方なども、東湖の創意にもとづいてゐる。

それに有名な『弘道館記』は、東湖が烈公の命を奉じて、不朽の一大文章を書くつもりで、少からぬ努力を拂つた。彼れが會澤正志に與へた手紙には、「神州の一大文字にも相成

るべき儀、心體に任せず。慙愧此の上なく奉存候」と云つてゐるが、それは『弘道館記』起艸の意氣込を告げたのである。そして彼れは、平生の抱負を正志に打開け、「東藩學術の眼目に仕り、推して天下に及び、神州左衽の憂これなきやう仕り度、日夜の志願に御座候」と述べてゐるのによると、日本の精神文化を創建して、思想上、日本独自の面目を發揮し、海外文化を批判して、その是なるものを用ひ、非なるものを斥けようとした心持が浮び出てる。「西洋に屈するな、日本魂を以て頑張れ」と呼びかけてゐる東湖の聲がそこに聞えるやうだ。

當時は確かに思想國難の時代で、東湖らが曾てマルクス主義の如く異端視したのは、キリスト教だつた。その宣教師らが、いろ／＼の手段で、日本國民をキリスト教へ引入れやうと努めてゐるのを非常に憂へた。之に對抗してゆくには、どうしても、日本の神道精神を高調し、その理論の到らぬところは、儒教の説によつて補はうとしたのである。それが東湖らといふ「神儒一致」であつた。

勿論、日本を中心とする以上、神道が本幹で、儒教は補助機關だから、本末、内外の辨は、最初から明かである。それから日本國民道德の特色として、(一)忠孝一致(二)文武調和(三)學問・事業の一致などを眼目として擧げてゐる、更に幕末非常時における際、舉國一致の精神を必要として、「衆思を集め、群力を宣べ、以て國家無窮の恩に報ず」と云つた。かうして東湖は、思想國難に打克たうとしたのである。

それから東湖の『常陸帶』を見ると、烈公が藩政改革の始終、及びその意義の存するところが、よくわかる。由來、水戸は政治經濟思想の早く發達したところで義公時代においても、夙に今日の社會政策の一端を實行した。士民の生活のため、率先、水道を設けたり、救貧事業に努めたりした。その後、藤田幽谷・小宮山楓軒(二四二四—二五〇〇)岡井蓮亭(二四一一—二四八六)などが出て、新しい政治經濟思想を述べた。

政治經濟方面に主力を注ぐ

殊に東湖に至つては、父幽谷の家學を繼承したのであるから、夙に政治經濟方面に留意し、時代にふさはしい施設を爲さうとした。かういふ具合だから、東湖は烈公を翼賛して、他藩では、容易に行ひ得ぬ改革を一氣に實現し、また時代に先驅した新施設をも爲した。その主力を注いだところは、(第一)經濟上の整理と救貧(第二)國防充實(第三)風教刷新などである。

先づ經濟方面の事についていふと、天保十一年、烈公は、藩士の經濟生活に同情し、彼等に貸出した金穀は新舊一切、棄損することとした。また藩府以外の人から借りた金は、この年、封祿の半分を出して返還の一部に充當させ、爾後は、年々少しづつ、債務を償却してゆくやう説諭した。

それから水戸藩では、農民生活について同情し、貧農を救ひ出すために、特に田畝の境界を正しくすることに力を注いだ。元來、水戸藩の田畠は、寛永の末、威公が丈量檢定をした儘、二百餘年を経たので、昔、上田だといはれたものも今は下田となつてゐるに拘らず、や

はり、昔の儘の上田としての租税を収めしむるといふ矛盾があつた。中でも、一番弊害が多かつたのは、富農が貧農を壓迫して、土地買入の際、十石の收穫あるものも唯三四石に相當する收穫あるものとして買入れることだつた。この場合、富者は唯三四石に相當する租税を納め、他の六七石に相當する租税は、貧農の手で収めねばならぬといふ弊を生じてゐた。烈公は、右のやうな事情を察して、貧者を憫れみ、田畝の境界を正しくすることに努めたのである。その結果、貧農は大分、助かつた。それらについては、やはり、東湖の『常陸帯』の中に詳しく書いてある。

第二章 藤田東湖の歩いた道（下）

烈公の奇禍と東湖の憂憤

かく烈公の政治刷新は、東湖の補佐、獻策に待つところが多く、「水戸には東湖がゐる」といふので四方の名士は東湖を訪ふためにわざわざ水戸に來たものも少くない。西郷南洲（二四八七—二五三七）・横井小楠（二四七〇—二五二九）等も、やはり、左様した人々の中にあつた。

小楠が東湖に會つたのは、御用調役の時代で、『遊學雜誌』のうちに東湖の風采を素描して、「年三十八歳（當時三十五歳）色黒の大男、中々見事也」といひ、眼光炯々と光つて、人を壓するやうな威力を備へてゐたといひ、更に「辯舌爽やかに議論甚だ密、應接極めて神速也」といつた。また服装については、「布の肩衣、奈良の帷衣、葛の袴、脇差は鐵金具にて、木綿糸を巻き、鞆は皮包也」と書いてゐる。

それから大西郷が東湖を訪ふたのは、晩年（四十九歳）の頃で、西郷は當時、二十八歳だった。かく年齢の上に父子ほどの差があつたから、西郷は、最初から東湖を先輩として敬ひ、東湖は西郷を將來望多き人物として款待した。そして西郷が將に東湖のもとを辭し去らうとしたとき、東湖は「ちと本を讀まれてはどうか」と注意した。西郷はこの忠告に心を動かし、再び座敷へ上つて、「今後讀書につとめますから宜しく御指導願ひたい」と懇請した。こんな具合に、西郷は、始終、東湖に師事する態度を執り、「天下眞に畏敬すべきは東湖先生だ」と友人に語つたといふ。

時に、茲に東湖の生涯にとつての大きい打撃が起つた。それは、烈公の急進主義が幕府の誤解を受けて、譴責されたことである。そのため、烈公は封を世子（順公）に譲つて謹慎した。これは、烈公の全く豫期しないところで、烈公としては、胸中、少からぬ不満があつたことと思はれる。

蓋し烈公は左視右顧することをしないで、政治改革については、眞に思ひ切つた遣り口を

示した。その中でも、佛教界を清めるために墮落僧を追ひ拂つたり、或は寺院を破却したりしたことが、佛僧の憤怒と呪咀とを招き、それが幕府に向つて烈公を讒言する一主因ともなつた。それに烈公の爲すところは、幕府の意表に出て、追鳥狩の名目で、旺んに軍事訓練をしたなども、物騒だとして、幕府の忌むところとなつたのである。

當時、幕府當局は七ヶ條の訊問を烈公に突き付け、その理由を詰つた。それについて水戸の元老、中山備後守から、明快に幕府に辯解したけれども、當局は聞入れない。疑惑の眼で、ちつと烈公を見つめてゐた。

當時、烈公が幕府の召命に應じて、江戸へ出るとき、東湖に隨行を命じた。東湖は病中であつたが、ちつとしてをられず、決死の覺悟で、高熱に悩みながら、烈公に従つて江戸へ出た。

その時分、東湖は、幕府の詰問が當を得ないので、自刃して、公の冤罪を雪がうと迄思ひつめたことがある。が、左様すると、却て幕府の疑ひを深めることとなるかも知れぬと思つ